学図 小国520

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449661

文部省検定済教科書
財団法人学校図書研究会編修

国語五年生 下

小KC
G16
ち

学校図書株式会社発行

60388
教科書文庫
6
810
34-1950
01304
49661

寄贈

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449661

昭和二十五年　月

日文部省検定済小学校国語科用

国語五年生下

広島大学図書
0130449661

廣島大學
教育學部圖書

学校図書株式会社

中央図書館

広島大学図書
0130449661

もくろく

(一) 働く人々
一 燈台を守る人……4
二 新聞のできるまで……16
三 石炭をほる……25
(二) 読書会
一 おじさんの手紙……33
二 ある日の読書会……41
三 学級文庫……48
(三) 自然を見つめて
一 ふしぎな自然……63
二 けむりのゆくえ……65
三 あわのじゅ命……75
(四) わたくしたちの言葉
一 おもしろい言葉……87
二 言葉の話……98
(五) 母の物語
一 母の思い出……112
二 母への手紙……119
三 母の力……127
お仕事の手引……142
新しく出た言葉……150
漢字……155

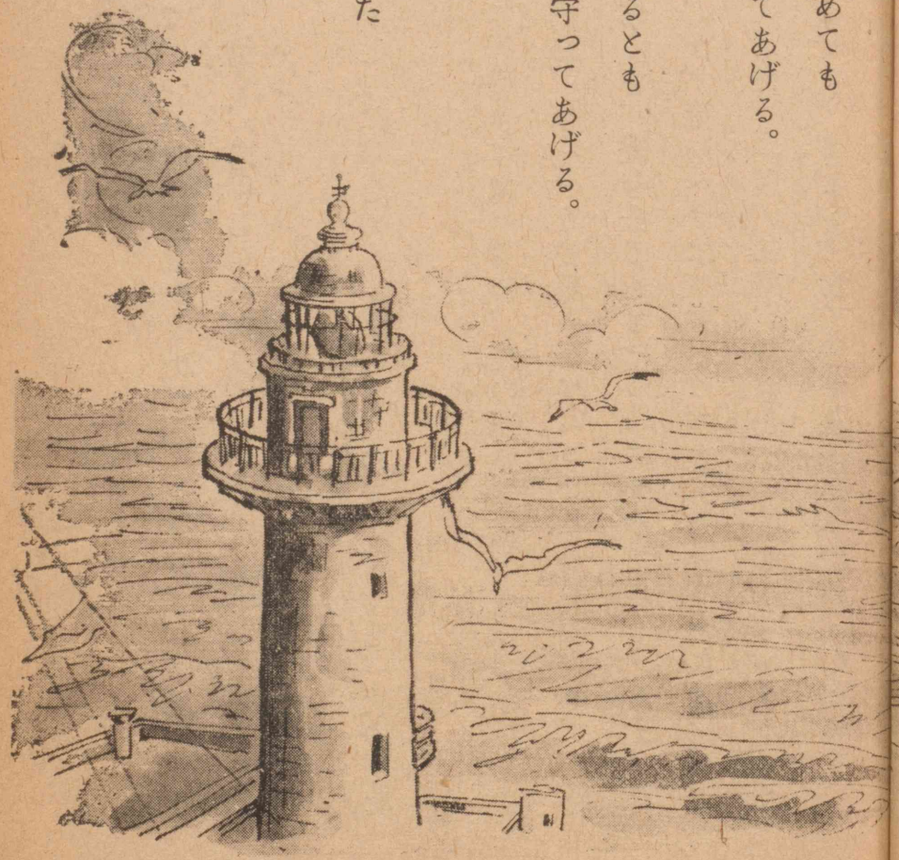
（一）働く人々

一　燈台を守る人

（一）

晴れた空。
鳥のはねのような白い雲。
青いガラスのような海。
やさしい母のような白い燈台。
夕ぐれが
くると、
ポッカリ火をともし
やさしく母のように船にいう。

きりがいっぱいたちこめても
わたしはおまえを守ってあげる。
星ひとつない。
海はふぶきであれるとも
わたしはおまえを守ってあげる。
船よ。
船よ。
たくさんの希望をのせた
船よ。



（二）

秋の日はすっかりくれて、つめたい空気がながれる。まつ林にふく風が、ザアザアとさわぎ、ときおり鳴く、名もしらぬ鳥の声が無気味に聞こえて、燈台の静けさをやぶる。

午後九時、燈台長といっしょに家を出た。ふたすじの光が、くらい夜の空に走る。

庭におりたつゆをふんで、燈台にはいると、光の弱い電燈が、さしわたし三メートルほどのまるいへやを、ぼんやりと照らしている。くつをぬいで、かなり急な、らせん状のかいだんを、燈台長のあとについて登っていく。だまったまま登るふたりの足音が、うす暗いへやにひびく。いま、自分のからだが、別の世界に連れられていくようだ。二階、三階、燈台長が平気で登られるのがふしぎなくらい、息をはずませる。まどが少なく外が見えないのが、かえって、

さいわいである。やっと、六階まで登った。

六階は、レンズだけのへやといいたいぐらい大きなレンズが、ふたつ、向き合ってささえられている。すみの方に小さくなって、わかい人が仕事をしていた。レンズはにぶい音をたてて静かにまわっている。レンズを通す光で、顔に、ほのかなあたたかさが感じられる。

「燈台の上で見ると、静かにまわる光ですが、船からは八秒ごとに白と赤の光が、かわるがわる見えます。」

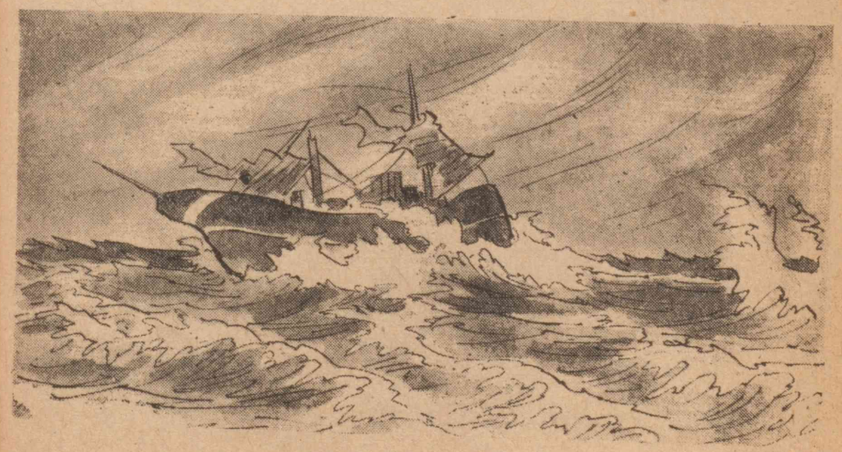
と、燈台長が説明する。二十一海里の遠くまでもとどくという強い光は、二本の帯のように見える。

「すばらしい光ですね。」というと、

「航海する船にとっては、太陽のようなものですよ。六月二十三日の夜も、ひようりゆう船をみつけましてね。」

こういって、燈台長は、その時のようすを思い出したように話しはじめた。

「六月十八日、日本に上陸した台風のために、このあたりは、はげしいあらしになり、海上もずいぶんあれました。りょうに出ていた漁船は、台風のしらせがあると、あわてて港へ帰ったのですが、一そうだけおくれて、台風にであってしまいました。台風がさったあと、村の人々は船を出してさがしたり、ラジオをとおしてたずねたりしましたが、見つけることができませんでした。なかばあきらめていた二十三日の夜、この燈台から、助けを求め



ながらひょうりゅうしている船を見つけました。さっそく、村の人に知らせ、助け船を出して助けたのですが、一週間ほどひょうりゅうしたりょうしたちは、すっかりつかれきっていたそうです。あとで、この燈台にお礼をいいに来ましたが、その人たちは、なんとかして燈台の光を見つけ、それに近づこうと努力したと話していました。わたしは、みんなが無事であったことを喜んだのですが、それ以上に、自分の仕事への生きがいを感じました。」

燈台長の話す言葉には、なんのかざりもないが、人間を愛する美しい心があふれていた。

「いまごろのように、いい天気の時には仕事は楽ですが、これから寒くなって、つめたい風やふぶきがふきつけるようになると、波が高くなるので、船の航行がむずかしく、それだけに、わたしたちも気を張っていなければならないわけですよ。

その上、生活も苦しくなります。ここは、ほかの燈台に比べて、村里に近くわりあいに楽ですが、北海のはなれ島にある燈台など、冬の間は、まったくあなの中の生活といってもよいでしょう。

これは、なん年も前に、北海道の西方にある燈台であったことです。北海は、なん日も悪い天気が続き、海があれ、その上、ふぶきがはげしく、船の航行は絶えてしまいましたが、ひとばんでも燈台のあかりを消すことはできません。その燈台の人々は、あらしと戦い、あかりを守っていましたが、もう二か月あまりも、陸からたべものが運ばれず、このままでおれば、うえじにするよりほかはなくなりました。しかし、それを知らせることさえできなかったのです。その時、燈台を守っていた人の中から、ひとりの人が決心して、ふぶきのあれる北海に小さな船を乗り出したのです。船の人も残る人も、もう二度とは会えないと、なみだで別れたそうですが、さいわいに、向こう

の陸について、たべものを持って帰ることができたという、話も伝えられています。

同じ仕事に生きる人たちへの友情のこもった燈台長の言葉は、自分のさびしい生活をこえて、深い思いやりにあふれていた。

ガラス戸をあけて、ろうかへ出てみた。へやの中では感じなかった風が、強くからだにあたる。かみの毛をさかだてるような風だ。燈台長について、ろうかをひとまわりしてみた。黒ひと色の海は、はてしなく続き、点々と見えるいさり火が、なつかしさをさそった。遠く水平線から見あげる空は、きれいに晴れて、あまの川がはっきりと見える。

「よく晴れた日には、あのあたりに島が見えますよ。」

と、燈台長が指さすのも、方角だけで、見ることはできない。ただ、北極星がまたたいていた。

岩によせる波の音が、ザブン、ザブンと、ゆめの国へさそうように聞こえ、そのくだけたあとが、ぼんやりと白く見える。波のよせているところまで六十メートルもあるという、燈台長の言葉を聞いてびっくりした。

「さびしいですね」というと、

「いや、もう、わたしたちはなんとも感じませんよ」と、あっさりと答えた。

やがて、三時間の勤務時間が過ぎて、こうたいの人が登って来た。

「ごくろうさん」と、あいさつをして、燈台長について、燈台をおりていった。かいだんをおりながら、

「それにしても、ときどきは、子どもがかわいそうだと思うことがありますよ」と、燈台長は、親としての気持をしみじみと話される。

ふと、いつか読んだ本の中の、燈台に育った子どもの思い出の記がうかんできた。

「雪深い北国のみさきというよりは、北海のはなれ島とよぶのにふさわしい燈台での、人間ばなれのした生活の中に、小さいころの自分を見出すたびに、わたくしは、ほおえまずにはいられません。父と母と兄と弟と、となりのおじさん、おばさん、小使のおじいさん、雪のころにはひと月かふた月ぶりに来るゆうびん屋さん。六才から八才の春までにわたくしの見た人は、これくらいでした。なん十日ぶりかで、雲の間から顔を出したお日さまに話しかけたり、花と遊ぶことは知っていても、それをつむことを知らなかった自分でした。道ばたの草にも話しかけ、鳥やうさぎや虫も、みんななかよしの友だちでした。わたくしは、いまでも人のきらう毛虫も平気です。ときおり、お米やかんづめの荷物といっしょに、町から船につまれて来る絵本の中の、雪のない町のお正月をふしぎに思ったり、見たことのないうまや自転車を想像したりした。なんでも聞きたい見たいころのまる二年を、ふしぎと想像の中

に生活していたのでした。……」

「わたくしが物心ついたのは、志摩の小島燈台にいる時でした。そのころから、わたくしは父の仕事がだいじなことを知り、『わたしのおとうさんは、だれよりもえらいのだ。』『燈台のあかりを消してはならない。』ということが、だんだんわかってきました。それは、そばから教えられたわけではありません。まっ暗な夜に火を見つめている父の顔、船のきてきに耳をすませる父のようすなどが、わたくしにしぜんとそれを感じさせたのでしょう。わたくしの十数年の燈台生活——それは、どんなにさびしく、また、さびしさをあきらめていた生活だったでしょう。

海で生まれて海に育てられたわたくしたちは、世の中からわすれられても、自然は、わたくしたちを愛してくれます。わけて、海はわたくしたちをなぐさめてくれます。わたくしは、海を母とし、先生とし、兄弟として、愛し続

けております。」

その夜は、燈台長の家でおせわになり、あくる朝早く、燈台の人々に見送られて、山をおりていった。人なつかしげに、別れをおしむ人々のかげが見えなくなるまで、なんどもあとをふりかえりながら。

二　新聞ができるまで

二階の編集局の中にはいると、まず、正面の時計が目につきます。てんじょうから低くさがった、たくさんの電燈にもおどろかされます。

広いへやには、ところどころに通り道を残して、つくえがぎっしりとならび、どのつくえの上にも、白い紙がむぞうさにひろげられてあります。

つくえに向かってペンを走らせている人、たばこをすいながら考えている人、横向きにすわって話し合っている人、へやの中を歩いている人、立ったまま話している人、おもいおもいのかっこうで、人々が働いています。やにわに、ぼうしをかぶって、さっさと出かける人があるかと思うと、息をきらして、へやの中にはいってくる人もあります。

へやのすみの方からは、たくさんならんだ電話のベルが、つぎからつぎへと

なりひびき、「トウキョウ、トウキョウ。」

「フクオカ、フクオカ。」と、よび出す大きな声が聞こえたり、カチ、カチ、カチと無線を受けている音、タイプライターを打つ音がひびいて来たりして、広い編集局は、こっこくと動く世の中と同じように、あわただしく動いていきます。

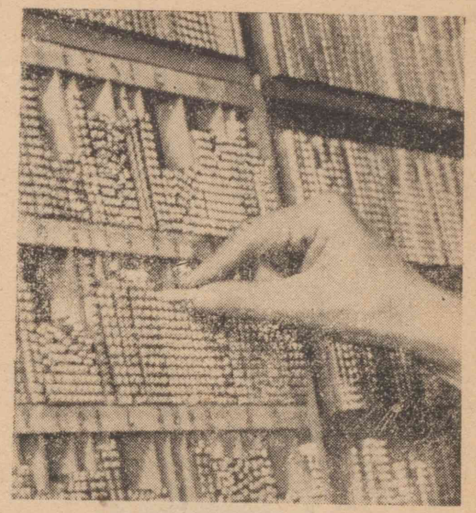
○

「こんなにたくさんのげんこうは、どんなにして集まってくるのですか。」

「そうだね。いろいろあるが、まず、電信、電話がいちばん多いだろう。それに、は

とを使うこともあるし、記者が、自分で持って帰るような場合もある。
「じゃ、あちこちに、ニュースを知らせる人がいるんですね」。
「そうだ。ニュースのありそうな所、役所や会社やけいさつなどには、毎日、記者がつめているし、いろいろな人に会ったり、会合にも出かけたりして、世の中のどんな所にも、あみの目のように、耳を向けているわけだよ」。
「外国のできごとは、どうするのですか」。
「外国にも記者が出かけていて、知らせたり、外国の通信社から聞いたり、また、ラジオによって集めるんだよ」。
「では、新聞社で働いている人は、ここにいる人だけではないのですね」。
「そうそう、そのとおりだ。外に出て、たくさんの人が働いている。この新聞社には、いろいろな仕事をする人がみんなで、七千人ぐらいはいるだろう」。
「たくさんの人ですね。じゃ、ここにいる整理部の人は、何をしているのです

か」。
「ここは、集まって来るたくさんのげんこうを読んで、世の中の人々が、どんなことを知りたいと思っているか、また、ぜひ知らせなければならないニュースは、何かなどと判断し、文章をなおしたり、ちぢめたりして整理し、最後に『見出し』をつけて、工場へまわす仕事をする係だよ」。
「むずかしい仕事ですね」。
「そうだ。ねうちのあるニュースを、一日も早く、そして正しく、みんなに知らせなければならないのだから、たくさんのげんこうの中から、どれを選ぶかが、なかなかむずかしいことだ」。
「じゃ、ここは、新聞社の頭ですね」。
「そのとおりだ。しかし、頭だけではだめだからな。手や足の仕事もだいじだよ」。



○

文選というのは、編集局からまわって来たげんこうを見ながら、活字を拾い出して、小さなはこの中に文章のとおりにならべるのです。

そこには、活字がぎっしりとつまったはこが、ななめにならべてあります。

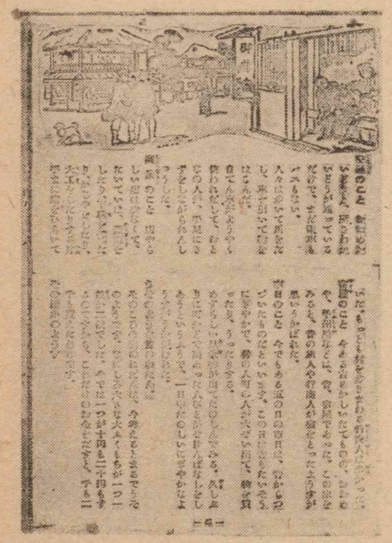
いま、日本の新聞は、当用漢字千八百五十字以内の文字を使っていますが、人の名前や土地の名前には、このほかの文字も使われますし、ひとつの文章には、同じ文字がなんべんも出て来ますので、いつでも用意しておかねばならない活字は、たいへんな数になります。

ひとつのニュースを拾い終ると、そのまわりを糸でゆわえて、すぐ横にある

鉄の台の上に運びます。そこには、たくさんの文選係から、こうして、つぎつぎにニュースが活字になって運ばれて来ます。

時間がくると、整理部の人もいっしょに、そのニュースを、新聞一ページにはいるように、しかも、たいせつなニュースを上の方に、また、全体が読みやすく美しいようにならべます。これを、「大組」といいます。「大組」は、ならべ方ができあがった新聞と左右が反対になっていて、いちばん右の上にあるはずの題字も、「大組」の時には、左上になっています。

「大組」がすむとその上に、特別の紙をのせて、大きなローラーの機械でおさえつけ、活字や写真版のでこぼこを紙に写しとります。



これを「しけい」といいます。「しけい」の文字は、ふつうの新聞と同じになります。「しけい」は、えん版にするために、えん版工場に運ばれます。

そこには、大きなろの中に、なまり、すずなどの合金がどろどろにとけています。初め運ばれた「しけい」を、まるいつつの機械の中に入れて、かまぼこの形にまげます。つぎに、それを別の機械に入れ、その中に、どろどろにとけた合金を流しこむと、「しけい」のでこぼこを、こんどは、また、反対にうつしとって、半円形のえん版ができるのです。

こうしてできたえん版が、輪転機にかけられて、いよいよ印刷が始まるのです。

○

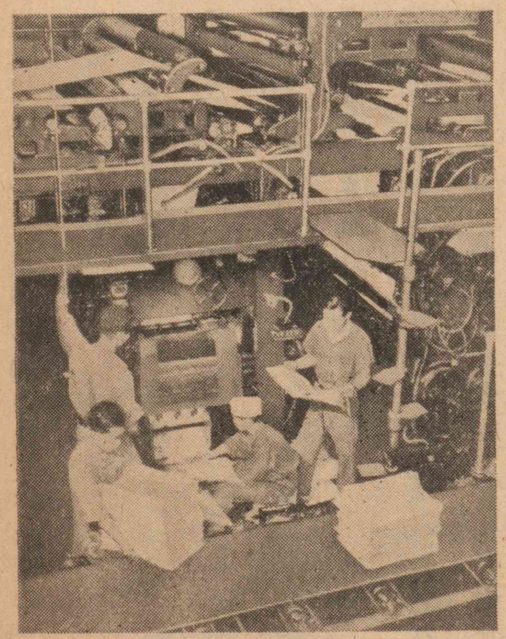
ここは印刷工場です。見上げるように大きな輪転機がならんでいます。ぴかぴかと黒光りのする機械から、油やインクのにおいがへやいっぱいにひろがっ

ています。

輪転機のまん中には、まるいつつが二つずつ、上下に見えます。このまるいつつに、えん版をはめるのだそうです。

ちょうど、夕かんを印刷するところを見ました。

ボタンをおすと、機械はごうごうと音をたててまわりだし、まっ白な紙が地下のへやから流れ出て、まるいつつの間をすべるように進んでいきます。その間に、うらおもてが印刷され、二つにおられた新聞は、あとから、あとから、流れ出ます。



「目で見る社会科」より

係の人が、注意深く、また、思いやるように、機械の動きを見守っています。ぷうんと高く、新しいインクのにおいがただよいます。

いま、記者の苦心、編集局の人々の苦労、工場の人々の努力によって、新しいニュースをのせた新聞が生まれているのです。できあがった新聞を手にして、むさぼるように読んでいる人々の顔には、ちょうどわたくしたちが、学級新聞を作った時のうれしさのように、働く喜びがあふれていました。

印刷された新聞は、五十部ずつに区切がつけられたまま、荷造場へ送られていきます。荷造場では、紙につつむ人、なわをかける人、手つきもあざやかに、荷造りができあがっていきます。

トラックはエンジンをかけて待っています。つみこみの終ったトラックが、新聞社の旗をひるがえしながら、駅へ向かって走っていくのも、もうすぐでしょう。

三　石炭をほる

ぼくは、おじさんの勤務している炭こうを見に行きました。これは、その報告文です。

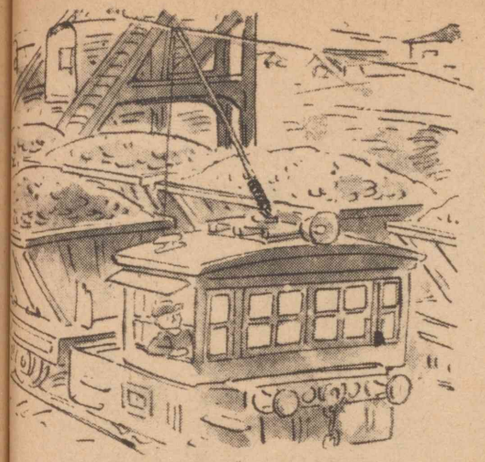
おじさんの家は、駅の近くの、同じような家がいくつもならんでいる社たくの中にありました。あまり大きな家ではありませんが、きちんとした、明かるい家でした。

おじさんが「つかれただろう。お湯に行こう」。とおっしゃったので、ついて行きました。お湯は、社たく町の中ほどにあって、とても大きく、ぼくの町のお湯などとは比べものにならないくらいでした。

あくる朝、「まさお君、出かけようか」。と、おじさんがおっしゃったので、いっしょに行きました。大きな病院の横を通り、広い運動場を通りぬけて、事務

所に行きました。

そこで、おじさんは服を着かえ、ぼくには、運動ぼうによくにた形で、電燈がとりつけられるようになっているぼうしを、かしてくださいました。つぎのへやで電燈をわたされたので、おじさんにてつだっていただいて、からだにつけました。少し頭が重く、首がだるいように思いました。



用意ができたので、たてこうの入口に行きました。大きなつながが、見上げるような鉄のやぐらから二本、地下の方へのびて、一方は上へ、一方は下へ動いていました。

まもなく、石炭をいっぱいつんだ炭車を二台乗せたケージが、ぴたりととまりました。よく見ると、その炭車がそのまま外のレールに乗り移られるように、とまっています。そこで働いている人が、炭車をおすと、にぶい音をたてて、レールの上を向こうの方へすべって行きました。この炭車は、選炭場に行くのだそうです。

ぼくたちは、炭車のなくなったケージに乗りこみました。ベルがなると、すうっと、ケージは音もなく動き始め、とたんに、からだが軽くなったような気がしました。たてこうのかべが、ぐんぐん上へ走っていきます。だいぶ深くはいったのでしょう。耳の底が、おしつけられるように思われました。五十三秒、ケージは静かにとまりました。

ケージをおりると、そこはとても広い所で、かべもてんじょうもれんがづくりで、電燈がたくさんついています。ぼくたちの乗ったケージの前には、何十台もの石炭をつんだ炭車がきれいにならんで、外に出るのを待っていました。

たいらなこう道が、そこからあちこちにのびています。どのこう道にもレー

ルがしいてあって、そのレールのまん中を、大きな鉄のつなが、ごっとり、ごっとりと動いていきます。

ぼくたちは、こう道の一つを歩いて行きました。せなかの方から、すずしい風が気持よく通りぬけていきます。

こう道が終ると、大きなレールでかべをささえた所に来ました。炭こうだから、まっ暗で、黒い石炭のかべが続いているはずなのに、いま通っている所は、かべもてんじょうも白く見えて、少しも炭こうらしくありません。おじさんが「あれは白い粉をぬってあるんだよ」と、教えてくださいました。

左に曲がって進むと、こう道は少し小さくなって、一メートルおきぐらいに大きなまつの木を組んで、かべとてんじょうをささえています。

とちゅう、何回も炭車にあいながら、曲がり曲がって進んで行くと、ドドドドと、はらの底にひびくような音が聞こえてきます。おじさんが、

「まさお君、まもなく現場だよ。頭や足もとに気をつけなさい。」

と、いわれました。

よく見ると、足もともてんじょうも、でこぼこしていて、何本もの鉄管やゴム管のようなものがおいてあるし、かべやてんじょうをささえたわくも不規則に立っています。

そのおくの方から、もうもうと石炭の粉がわき出ているのが、ぼうしにつけている電燈の光に照らし出されました。

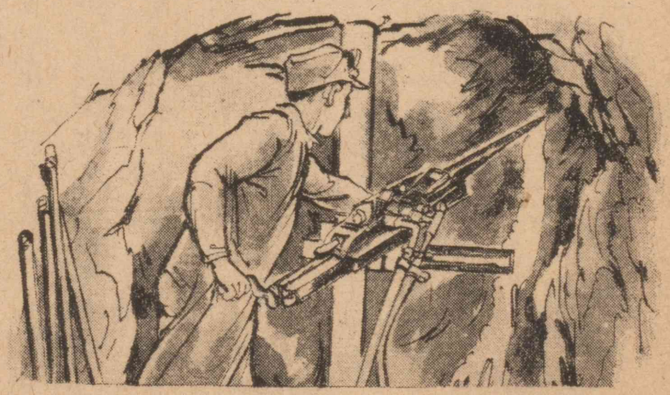
その石炭の粉の向こうに、ふたりのわかい人がはだかで、大きな機械をかかえるようにして、石炭のかべにおしつけています。ガガガガと、無気味な音をたて、その機械の先から鉄のぼうがまわりながら、石炭の中にはいっていきます。石炭の粉が、顔やからだにふきつけるように、とび出しています。両足をぐっとふみしめ、鉄のぼうの先をじっと見つめている人々の顔には、しんけん

さがあふれていました。

その現場で、ちがった機械を使って、石炭をほり出している人もありました。水をまいて、こう道の中にひろまった石炭の小さな粉をしずめている人も見えました。

いま、働いておられる所は、「きりは」といって、石炭のかべの下の方を、機械でほり、上の方にあなをあけ、このあなに特別のばくやくを入れて、ばく発させ、石炭のかべをこわしてほり取るのだそうです。

つぎの「きりは」にいくと、そこでは、何十人もの人が、顔もからだもまっ黒になって、シャベルやざるで、石炭を鉄の大きな



といの中に投げこんでいました。鉄のといは、カラカラと音をたてながら、くさりに引かれて、炭車の来ているこう道の方へ動いています。しぜんに炭車の中につみこまれるようになっているそうです。

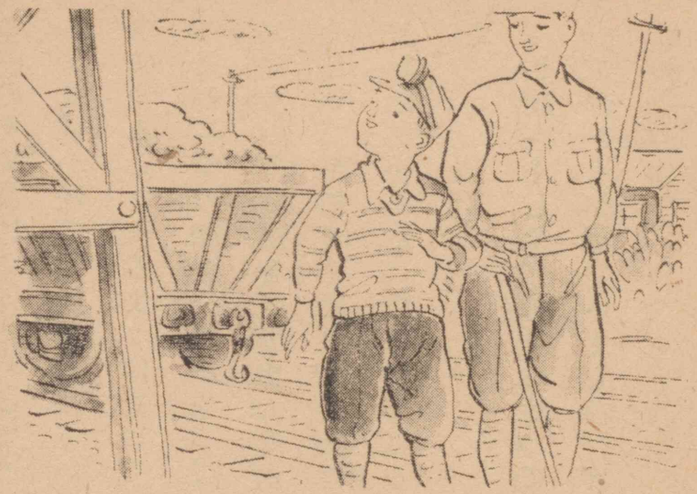
この二つの組が一つになって、夜昼なくこうたいで働き、一日に約百五十トンぐらいの石炭をほり出しながら、進んでいくのだそうです。

この「きりは」を出て、先に行こうとすると、「ピーッ」と、ふえがひびいてきました。とまって待っていると、まもなく、「ドドーン」と大きな音がしました。

しばらくして、そこへ行ってみると、石炭の大きなかたまりや、小さなかたまりがころがっていました。ばく発によって、石炭のかべがこわされたところです。

「さあ、ひととおり見たから、ぼつぼつ引き返そうかな。」と、おじさんがおっ

しゃったので、別のこう道を通って出ることにしました。



とちゅう、こう道の中の悪い空気を調べている人や、レールやわくをなおしている人にもあいました。

いよいよ、はいる時に乗ったケージのそばに来ました。

一日中、太陽を見ないで、地下で働いている人々に、心の中で感謝しながら、ぼくたちは、また、ケージに乗りこみました。

外に出ると、すみきった青空がとてもまぶしく、いつもすっている空気が、なんだかちがっているように思われました。

(二) 読書会

一 おじさんの手紙

まさお君。

きょうは、お手紙ありがとう。みなさん元気だそうで何よりだ。ぼくの方もかわりなく、くらしている。きみの家で過ごしたこのあいだの数日は、ちえ子もよほどおもしろかったらしい。

「おとうさま、また、まさおさんのいなかへいこうね」。

などといっている。このごろ字を書くのがおもしろいらしく、「まさおさんに手紙を出すんだ」といって、つくえに向かっていっしょうけんめいだ。どんな手紙がいくかわからないけれど、ついたら返事をやっておくれ。

ところで、まさお君。

このあいだ、きみの家にいった時、きみのおとうさんから聞いたことだが、きみはこのごろ毎日まん画の本ばかり読んでいるそうだが、ほんとうだろうか。おとうさんは、それについてたいへん心配をしているのだ。

ぼくは、もしきみが、そういう本ばかりを読むのだとしたら、おとうさんたちが心配なさるのは、もっともなことだと思う。

しかし、ぼくはまん画やぼうけんものが、どれもこれも悪いという考え方にも、さんせいすることはできない。

ぼうけんものでも、「トム・ソーヤー」や「十五少年」などは、日本中の子どもたちに、一度は読んでもらいたいとさえ思っている。また、まん画の発達から生まれたガリバー旅行記のようなえい画は、人間の持っているたからといってもよい。

しかし、おとうさんたちが心配するのは、このごろ出ているまん画やぼうけんものには、あまり感心のできないものがあるからだろう。

ぼくは外へ出るたびに、きみやちえ子に読んでもらいたい本をさがすために、本屋にいく。すると、少年少女を相手にした本はずいぶん多いが、これはと思うようなものがほんとに少ない。

そこで、まさお君。

まん画などしか読まないと、どんな少年になるのだろうか。それについて、ある人が調べてくれたものがある。それを、ここに書いてみよう。

一　まじめな考え方が、心の中に育っていかない。

二　努力して読書する気持をなくしてしまう。

三　深くものを考える態度を失っていく。

四　人の美しさを認める心が少なくなっていく。

まん画だけ読んで、ほかの本を読まないとこんな少年になっていくというのだ。考えなければならないことではないだろうか。

まさお君。

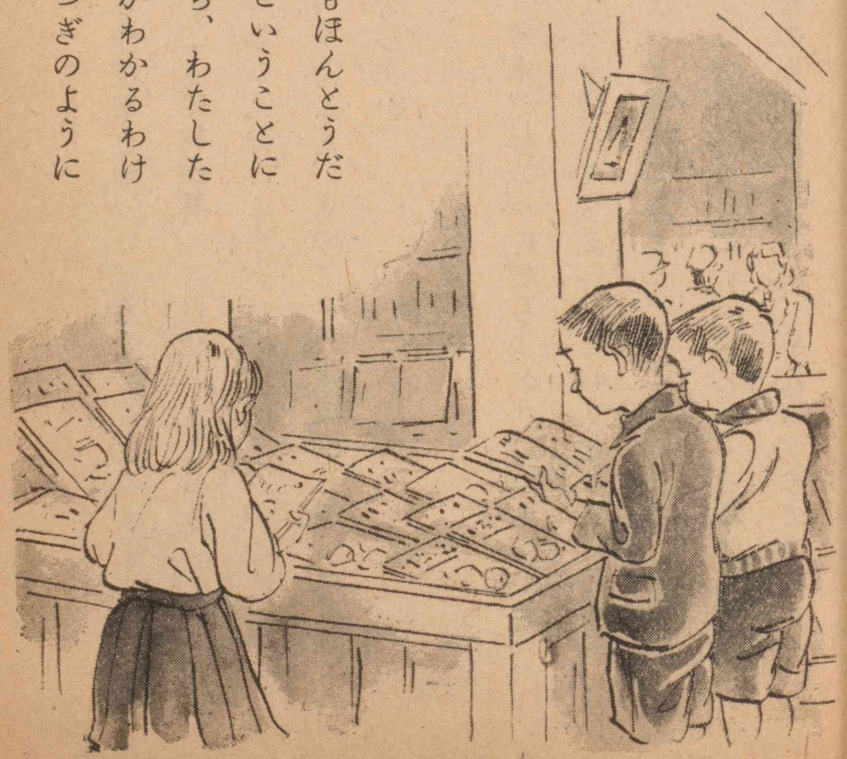
そこで、少しかたぐるしくなるけれども、きみたちはどんな本を読んだらいいのかについて考えてみよう。

「どうして、われわれは本を読むのだろうか」。と、たずねるときみはすぐ、「それは、おもしろいからさ」。と、いうかも知れない。そのとおりだ。みんなは、おもしろいから本を読むので、それにまちがいはない。

しかし、おもしろいからばかりで本を読むのではないということも、考えなければならない。それには、つぎの表を見てもわかることだろう。これはぼくが、少年たちは、どんな本が読みたいかを調べたものである。

1. こっけいな話
2. 電気やひこうきや月や星の話
3. 勇ましい話
4. 心をやさしくする話
5. 心を美しくする話
6. 正しいことを教える話
7. こん虫や動物や植物の話
8. さびしい話

おもしろいから本を読むというのもほんとうだが、そればかりでないことも事実だということになる。ここにあげられていることから、わたしたちは、なぜ本を読むのかということがわかるわけだが、それを一口に言ってみると、つぎのように



なるのではなかろうか。

わたしたちは、いろいろなものごとの道理を知って、人間としてのすぐれた生活をするために本を読むのだ。何がよくて何が悪いのだということも、それについての正しい知識や、それをはっきり見分ける力がなければできることではないし、どんなにしたらいいかということも、ものごとの道理がわかっていなければ、うまくできないのではなかろうか。

まさお君

これで、本を読むことのほんとうの意味がわかっただろうか。このように本を読む目あてを考えてみると、どんな本を選んだらよいかということもはっきりしてくるわけだが、念のため少しばかり書いてみよう。

ぼくの考えでは、本を読むのに何よりだいじなことは、いろいろな本をたくさん読むということだ。まん画を読むのもけっこうだが、そればかりではなく、

科学の本も、伝記のようなものも、童話も、詩も、なるべくいろいろなものを読むようにしよう。いろいろなものを読めば読むだけ、心も広くなり考え方も正しくなって、世の中のことがはっきりわかるようになってくる。

ここでもうひとつ考えたいことは、一さつの本をなん回もくり返し、くわしく読むということだ。ただなにげなく読みとおした本も、もう一度読んでみると、今まで気がつかなかったところに、おもしろみを感じたり、考えさせられることがある。一さつの本を十回も二十回も読んだという人の話をよく聞くが、そういう人は、一さつの本から読むたびごとに新しい意味を受け取っているわけで、こうなればなんさつもの本を読むと同じようなねうちがあるわけだ。

まさお君。

本を選ぶ時、いちばんこまるのはどれがいい本で、どれが悪い本かという、見分けがつかないことだろうが、これもいろいろな本を読んだり、一さつの本をくわしく読んでいるうちに、しぜんにわかってくるようになる。

こう考えてくると、いろいろな本をたくさんしかも、くわしく読むことが、読書の力をつける最もよい方法だということがわかるだろう。

本を読む目あてがきまり、何を読むかが決まったら、こんどはどんなにして読むかということだが、これはきみが自分で考えてごらん。

まだ、書きたいこともあるけれども、きょうはこれぐらいにしておこう。この手紙について、きみからどんな返事が来るか楽しみにしている。

おとうさんや、おかあさんによろしく。

さようなら

二　ある日の読書会

きょうは、まさお君たちの学級の読書会です。読書会は月に一回ずつ開かれます。学級文庫の係が中心になって話し合いをします。ある時は、みんなが同じ本を読んで、それについて感じたことを話し合います。またある時は、このごろ出ている新しい本について話し合いをします。

きょうは、学級文庫の本をどんなにして読むかということを、話し合うことになりました。

川村　まず初めに、このごろどんな本を読んだかということから話し合ってはどうだろう。

今野　学級文庫の本でなければいけないのですか。

川村　そんなことはない。学級文庫の本でも、ほかの本でもいいよ。

花見　ぼくは、「たから島」「十五少年」「トム・ソーヤーのぼうけん」などのぼうけんものを読んでいる。

今野　わたしは「世界のなぞ」を読みました。

池本　ぼくは野口英世とリンカーンの伝記を読んで感心させられた。

川村　みんな、いろいろなものを読んでいるね。だが、学級文庫の本があまり読まれていないようだが――。

木村　学級文庫の本はむずかしいものばかりで、おもしろくないわ。

今野　わたしたちの読みたい本がないんだもの。

川村　じゃ、みんなどんな本が読みたいか話し合ってみよう。せっかく学級文庫があるのに、うまく使われないのはいけないことだから。

まさお　ちょっと待って、きのうぼくの所へおじさんからこんな手紙が来たんだ。いま話し合っていることと関係があるから読んでみよう。

まさお君はこういって、おじさんの手紙を読みました。みんなはどんな手紙だろうと思って、じっと聞いています。だんだん読んでいくうちに、みんなはすっかり感心してしまいました。いつもおもしろいことをいって、みんなをわらわせる花見君も、しきりに考えこんでいます。

池本　ううん。おじさんの手紙を聞いていると、今までの読み方がなんだかはずかしいような気がするな。で、きみのおじさんは学者かい。

まさお　学者というわけではないんだが、とても勉強する人だよ。おじさんの家にいくと、へやいっぱいに本がつんであって、すわる所もないくらいなんだ。

川村　おじさんの手紙をもとにして話し合いをしたらどうだろう。

木村　それがいいわ。わたしたちの話したいことがいろいろ書いてあるから考えるのにつごうがいいと思います。

川村　では、おじさんの手紙で気のついたことをいうことにしよう。

池本　ぼくは「トム・ソーヤーのぼうけん」を読んだが、おじさんがあんなのがいいといっているのでうれしくなっちゃった。

今野　あれは、ちょっと気味が悪いわね。

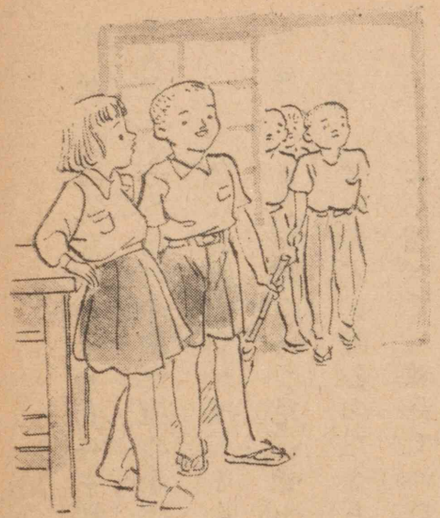
花見　ぼくも読んだが、トム・ソーヤーはずいぶんいたずらものだね。

池本　しかし、ほんとにありそうな話だよ。この組にもトム・ソーヤーにているものがいるんじゃないかな。

木村　おじさんは、本をたくさん読めとおっしゃっていますが、それにはどうしたらいいのでしょう。自分でそんなにたくさん買うことはできないし、学級文庫には少ししかないし——。

川村　学級文庫の本がきまった日に返ってこないことがあるんだが——。

まさお　それはまた、どういうわけだろう。



池本　そのことも考えなければならない問題だが、同時に本をふやしていく方法も考えたらどうだろう。

今野　池本さんの意見にさんせいです。

花見　本が返ってこないというのは、持って帰ってわすれたり、借りた人がつぎの人にまたがししてわからなくなるからだろう。

川村　そうなんだ。係の方から借りた人は、ちゃんとノートに書いてあるんだが、本の行き先がわからなくなってしまっているんだ。

木村　みんながもっと責任を持たなければいけないわけですね。

まさお　そうだ。学級文庫の本は、自分の本よりもたいせつにするというような心がけでやれば、そんなことはなくなると思う。

今野　まさお君のいうたいせつにするということだが、学級文庫の本はおおぜいの人が読むのだから、表紙なども破れやすい。そこで、借りた時よく調べて、破れていたらすぐなおしてから読むようにしたらいいんだがと思っている。

花見　みんなが、そのくらい責任を持つようになれば、本が返らないなどということはなくなるだろう。

池本　これから、みんなが気をつけることにしよう。ところで、学級文庫の本がふえていくような方法はないものだろうか。

川村　何かいい考えがありますか。

池本　このごろ町にたくさんある貸本屋から思いついたんだが、学級文庫の本を借りる時いくらかお金を出したらどうかと思う。そのお金をためておいては本を買っていくというわけだね。

これについては、学級文庫を読む人が少なくなるのじゃないかと心配して反対する人、お金を五十銭とか一円とかにすればいいだろうといってさんせいする人など、いろいろな意見が出ました。

それからまた、自分が新しい本を買った時、読み終ったら、一か月ぐらい学級文庫に出しておくようにすれば、みんながたくさんの本を読むことができるだろうというようないい意見も出ました。

このようにして、話し合いはつぎからつぎへと進んで、まさお君たちの学級文庫は新しい出発をすることになりました。

三　学級文庫

出る人　大田（男、図書係）　小池（女、図書係）
川本（男）　星野（女）
今川（男）　原（男）　山田（男）
生徒一（女）二（男）三（女）
ほかにろうかを通る生徒

教室の中。右の方に学級文庫の本だながあり、左の方に黒板やつくえなどがある。そうじ当番の生徒が教室をはいている。図書係の大田と小池は本の整理や貸出しにいそがしい。そのそばに五六人の生徒が集まっている。遠くの教室から歌声が聞こえる。

生徒一　小池さん、この本貸してね。

小池　ちょっと待って。こっちの方をかたずけてからでないと——。

大田　君、こまるな。せっかく今そろえたばかりなのに、ばらばらにしちゃって。

生徒二　ごめん、ごめん。ぼく、これを借りたいんだ。早くノートにつけてくれないか。

生徒三　わたし、この童話集を借りるわよ。

大田　だめだよ。順々にしなければ一度にできやしないよ。そんなにするなら休業にしてしまうから。

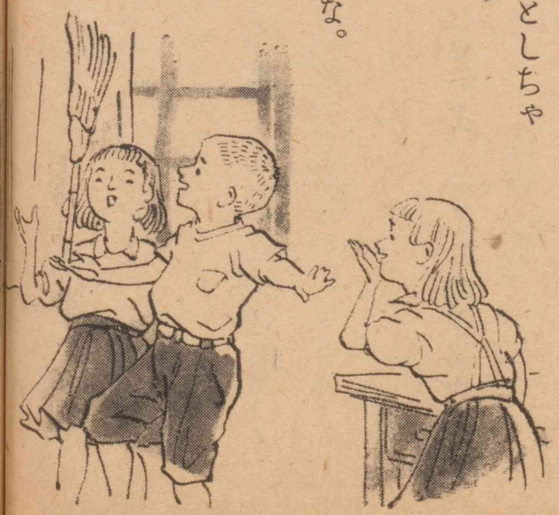
生徒三　また、大田さんの休業が始まったよ。ああ、こわい。

川本、ほうきを手の上にさか立ちにのせて、教室にはいって来る。

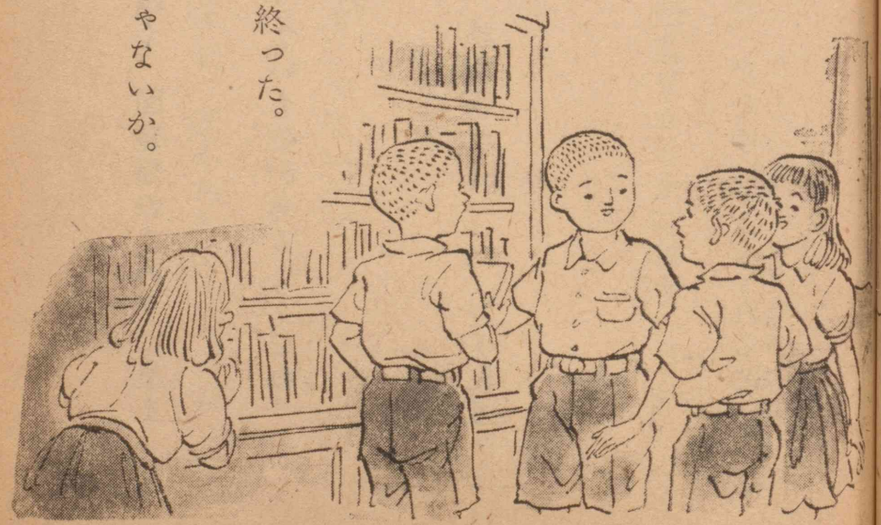
生徒二　川本君、遊んでいるのかい。

星野　あら。川本さん、またほうきの曲芸をしているのね。

川本　だって、ぼくの所もう終ったんだよ。どうだい、うまいだろう。
つぎは、何をしようかな。
星野　およしなさいよ。まだその辺ごみだらけじゃないの。
川本　あ、しまった。
星野　川本さんは、すぐふざけるのね。そんなことしちゃだめよ。さっさとそうじをしましょう。
川本、教室をはきだす。
大田　おや、この本はだれがなおしてくれたのかな。
小池　こんなに破れているのもあるわよ。
生徒一　図書係も、たいへんだわね。
生徒二　ぼくは、ていねいに見ているよ。
大田　こないかなあ。



小池　原さんですか。
大田　うん。きょうこそはきっと返すといっていたんだけど。
小池　きょうは持って来るでしょうよ。
大田　ほんとに持って来てくれるといいんだが——。
今川、水のはいったバケツを持ってやって来る。
今川　さあ、ぞうきんがけだよ。川本君、はくの終った。
川本　終ったよ。さあ、ぞうきんがけをしよう。
今川　川本君、本ばこの所、まだやっていないじゃないか。
川本　だって、大田君がいるんだもの。



今川　ちょっとのいてもらえばいいじゃないか。
川本、図書係のまわりをおどけたかっこうではく。図書係のまわりに集まった生徒、本を借りて帰っていく。
大田　どうも、このごろきまった日に、本を返さないものがあるようだね。
小池　また、みんなにいわなくちゃいけないわね。
大田　自治会の時、話し合ってみよう。
川本　大田君、これは考えなければいけないね。読みきれないで、おくれるんじゃないかな。
大田　そうかも知れない。
川本　返す日をついわすれるなんてこともあるよ。
星野　あつい本なんか、三日では読みきれないわ。少しのばしてくれるといいんだけど——。

大田　いつか、みんなで相談しよう。
小池　番号ふだがだいぶとれていますね。
大田　そうだ、きょう少しなおしていこう。(原、元気なさそうに教室へはいって来る。)あ、来た。原君、持って来た。
原　(だまっている。)
大田　持って来たのかい。どうしたんだい、いったい。
原　もう少し待って、きっと返すから。
大田　待ってくれって、きみは家へ取りに行ったんじゃないか。
原　ごめんね——あすきっと持って来るから。
大田　あしたは、ほんとうに持って来てね。でないと、ぼくたちがこまるんだから。
川本　(そばへよって来て。)どうしたの。

大田　五日も前に借りた本を、まだ返さないんだ。
川本　原君がかい。本なら、原君はB組の山田君に——。
大田　B組の山田君に。山田君に貸したのかい、原君。
原　（だまっている。）
大田　原君、ほんとうかい。
原　（だまっている。）
大田　そうなんだね。また貸しはいけないことになっているんだから、山田君にそういって返してもらったほうがいいね。
川本　ぼくが山田君にいってあげよう。
大田　あ、山田君が来た。ちょうどいいところだ。聞いてみよう。
山田　川本君。ちょっと話があるんだけど——。
川本　どうしたの。いまきみのことを話していたところだ。

山田　原君のことだろう。それで、あやまりに来たんだ。
川本　いったい、どうしたというんだい。
山田　原君の持っていた本が、おもしろそうだったから、また貸しは悪いということを知っていたんだけど、ちょっと借りたんだよ。ところが、その本をぼくがなくしてしまったんだ。
星野　あら、それはまたどうして。
山田　たしかにかばんに入れて家を出たんだが、学校に来てみるとないんだよ。だから、落としたのじゃないかと思うんだ。
小池　それはこまったわね。
川本　どうして今までだまっていたんだい。
原　ぼくが悪かったんだよ。
山田　いや、ぼくが勇気がなかったんだ。

大田　どうもふたりのいうことが、よくわからないね。本を落としたのは山田君なんだろう。

原　ぼくがまた貸しなんかしなければよかったんだよ。ぼくが貸さなければ、山田君が落とさなくてすんだのに。

山田　原君はあんなにいって、大田君にはぼくがあやまってなんとかするから、君はいわなくてもいいというんだ。それでぼくもつい、その気になってだまっていたわけなんだ。

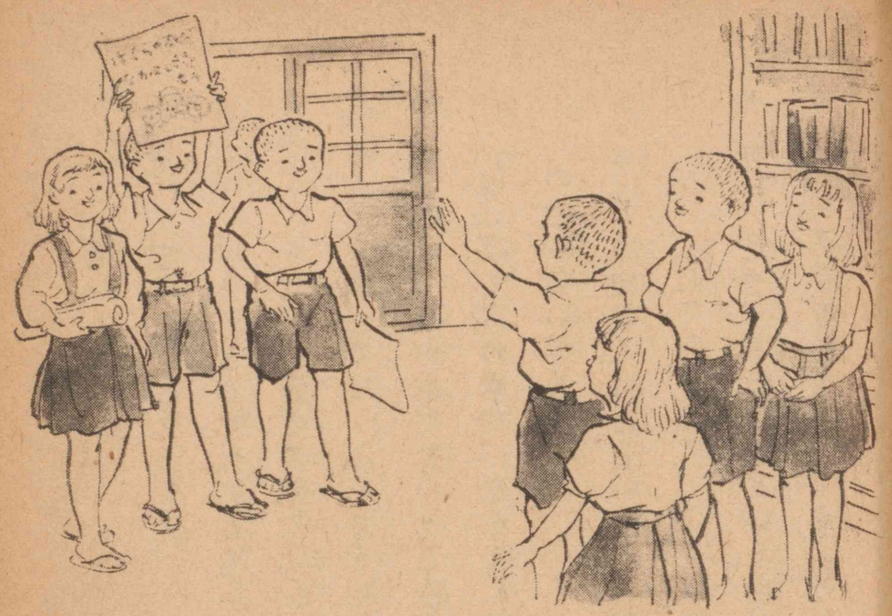
そこへ、四五人の生徒が手に手にポスターを持って、はいって来る。

生徒一　みんな、むずかしそうな顔をしてどうしたの。

生徒二　なにかあったの。

川本　きみたちこそどうしたの、手に持っているのはなんだい。

生徒三、ポスターを頭の上にかかげるようにして。



生徒三　はい、これを見てください。

小池　それをどうするの。

生徒三　これを学級文庫の本だなの所に、はっておこうと思うのよ。

大田　これはありがたい。ぼくも前から考えていたんだが——。

生徒二　——だろうと思って、ぼくたちがさきに用意してあげたということだね。

生徒三　これを書くのに三日もかかったのよ、三人で相談して、毎日学校がすんでから、いっしょうけんめい

書いたの。

川本　（感心して、）ふうーん。

小池　さあ、どこへはったらいいでしょう。

生徒二　それは、図書係の人にお任せします。ぼくたちの書いたものが学級の役に立てば、こんなうれしいことはないんだから。

大田と小池が本だなのうしろのかべにポスターをはりつける。ポスターには「ぼくらの本だ、なかよく読もう」「たいせつにしよう、学級文庫」などの字が書いてある。

山田　A組の人はえらいな。A組の人がこんなにたいせつにしている本をなくしてしまって、ぼくはほんとにどうしたらいいだろう。

大田　じゃ、本はないというわけなんだね。

原　そうなんです。でも、それはぼくがなんとかします。学級文庫から本

を借りたのはぼくなんだから、責任はぼくにあるんです。

山田　ぼくが落とさなければよかったんです。

川本　さあ、こまったね。何かいい方法はないものだろうか。

今川　それは、どんな本なんだい。

原　童話集なんです。

星野　いいことがあるわ。原さんは何か自分の童話集を持っているでしょう。

原　十さつぐらい持っているけど。

星野　そんなにたくさん持っているのなら、そのうちどれか一さつを、なくした本のかわりに学級文庫に返したらどう。

大田　それはいい考えだね。みんなどう思う。

原　そうしてもらえればうれしいけど、なんだか悪いような気がするね。

小池　わたしは、星野さんの考えにさんせいですわ。

山田　では、その本はぼくに返させてください。童話の本ならぼくも持っているから、あした必ず持って来ます。

原　ぼくが持って来ます。

川本　ふたりが言い合っていても仕方がないから――こうしない。ふたりでじゃんけんをして、勝った方が持って来るということにすれば、どちらも気がすむだろう。

今川　さんせい、さんせい。さあ、ふたりともがんばって。

原、山田のふたりがじゃんけんをする。なかなか決まらない。みんなはふたりをかこんでおうえんをしている。やっと原が勝つ。

山田　ざんねんだな。

大田　それでは、あした原君に本を持って来てもらうことにしましょう。

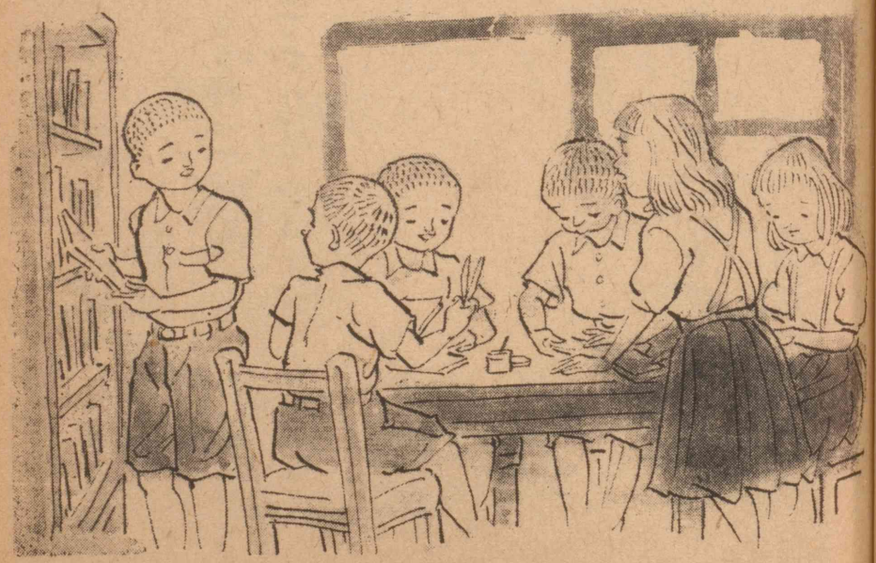
山田はだまって考えこんでいる。

星野　山田さん、どうかした。何を考えこんでいるの。

山田　どうしても原君にすまないような気がするんだ。(ちょっと考えてから。)じゃ、こうしてくれないか。ぼくはこれから毎日、この教室に来て、学級文庫の整理をしよう。それから、本の破れた所はしゅうぜんしよう。

川本　山田君、さすがにえらいね。

山田　あすからと言わずに、今からすぐやります。



山田はカバンから、ナイフやはさみを出して、本のしゅうぜんを始める。

山田　そうそう、のりがいるね。

こういって、山田は走っていき、すぐのりを持って来る。

今川　おい、ぼくらもてつだおう。みんなでやれば、しゅうぜんぐらいは一日でできるだろう。

星野　わたしもナイフをとって来るわ。

原　さあ、みんなでやろう。

大田　学級文庫、ばんざいだね。

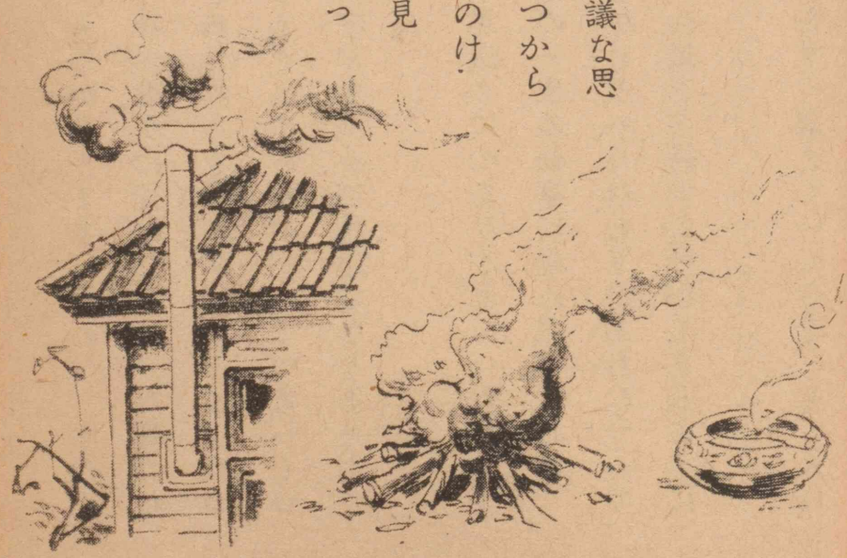
小池　ほんとに、うれしいわ。

まどガラスに夕日がさし、風がふいている。オルガンの音が聞こえてくる。

(三)　自然を見つめて

一　不思議な自然

わたくしがまだ子どものころ、いつも不思議な思いで、ながめていたものがあります。えんとつから出るけむり、たき火から出るけむり、たばこのけむり、せんこうのけむり、それらのけむりを見ていると、だんだん上の方へたちのぼっていって、どこへか消えてしまいます。いったい、どこへ行ってしまったのでしょうか。それが不思議で不思議でなりませんでした。



それとは別に、いまひとつ不思議に思ったものがあります。それは、水の上にできるあわでした。雨にふりこめられて、外へ遊びに行けなくなった時、わたくしはよく、えん側からお庭の景色をながめていたものです。すると、雨つぶにたたかれた水たまりの表面には、大小さまざまのあわが、いくつもいくつも現われては消え、消えてはまた現われるのが、なにか不思議でなりませんでした。

おさない時から、自然の美しさ、自然の不思議さに心をひかれていたわたくしは、大きくなってから、自然の研究を自分の一生の仕事に選んだのでした。そして子どものころから、不思議に思ってながめていたけむりやあわについて、いろいろの本を読んだりして、だんだん深い知識を、持つことができるようになりました。

けむりやあわが、現われたかと思うと、またすぐ消えていくのを、ある人は

世の中のありさまがたえず移りかわっていく、そのはかなさにたとえています。しかし一方で、この移り行く自然のすがたのうしろには、いつもかわらぬ自然の「きまり」があるはずです。その「きまり」、つまり自然の法則をたずねて行くと、けむりやあわの不思議も、きっととけてくるにちがいありません。このような、まなこをもって、いまいちど、けむりやあわを見なおしてみたらどうでしょう。

二　けむりのゆくえ

けむりとは、いったいなんでしょう。それは空気中にうかんでいる、小さいつぶの集まりなのです。

わたくしたちは、日光が雨戸のすきまやふしあなから、へやの中にさしこむ時、その光の通り道にあるほこりが、キラキラとかがやいて、はっきりと目にうつることを知っています。

ほこりの場合には、このようにして、つぶのひとつびとつが、はっきり見分けられるが、けむりのつぶを見ることは、ちょっとできません。それは、つぶがほこりよりも小さいからです。しかし、けんび鏡を使うと、けむりのつぶもまた、見ることができます。

科学者の調べたところによると、ほこりは、かりにまるい球の形をしているとすると、さしわたしは一ミリメートルの千分の一ぐらいですが、たばこのけむりのつぶですと、さらにその十分の一ぐらいです。つまりけむりのつぶは、一ミリメートルの一万分の一ぐらいの小さなものということになります。

こんな小さいものでも、近ごろできた、電子けんび鏡という、特別なけんび鏡を使うと、けむりのつぶの大きさや、形が、実にはっきりとわかります。

けむりのつぶは、固体のことも、液体のこともあります。

汽車や工場のえんとつから出てくる黒いけむりは、たいてい炭のような固体

のつぶが集まったものです。石油やローソクが燃えるとき出るけむりも、それと同じで、すすといっています。

たばこやせんこうのけむりのつぶは、やにと水からできていますので、液体のつぶと言った方がいいかも知れません。

お湯の上から立ちのぼる白いゆげは、けむりとはよびませんが、空気中に水の小さなつぶが集まってうかんでいるのですから、やはりけむりのなかまといえましょう。

けむりが、空気中にうかぶ固体または液体の小さなつぶの集まりであることは、いま話した通りですが、それが空に向かってのぼって行くうちに、消えてしまうのはなぜでしょうか。

それは、つぶがなくなってしまうからではありません。けむりのつぶが、広

い所に出たために、ばらばらに散ってしまうからです。ちょうど、池にインクを一てきたらすと、それが池の水の中にひろがって、やがてうすくなって見えなくなるのと同じです。

ところが、お湯の上に立つゆげは、前にのべたように水の小さなつぶからできていますが、これが消えて行くのは、ほんとうにつぶがなくなるからです。

水の小さなつぶは、きわめてじょうはつしやすく、すぐに、水じょう気という気体になって、見えなくなってしまいます。しかし、ふつうけむりといわれているものでは、つぶがじょうはつして、なくなることは、めったにありません。

さて、けむりのつぶがひとたび空気中にばらまかれると、それから風に乗って、はて知らぬ空の旅へとのぼって行きます。では、そのさきはどうなるのでしょう。

空気中にまい上がったけむりのつぶの中で、大きいものは、とちゅうで何かにぶっつかって、それについてしまったり、あるいは地面に落ちてしまいます。工場のたくさんある町では、いつもえんとつから、黒いけむりが出ているために、町全体がなんとなく、すすけて、黒っぽい感じがするのも、そのせいです。こういう所に住んでいる人たちは、いつもきたない空気をすっているために、けむりのつぶが、からだの中にはいって、悪い病気にかかることが、よくあります。

けむりのつぶの中で、ごく小さいものは、なかなか地面に落ちないで、いつまでも空気中にただよいながら、行く先を定めない旅を続けています。そして、それはしばしばすがたをかえて、きりになって現われます。

空にうかぶ雲も、地面に近くかかるきりも、空気中に小さな水のつぶが集まって、ただよっているのです。それで、これもけむりのなかまみたいなもので

す。ただ、つぶの大きさは、たばこのけむりやせんこうのけむりなどとちがって、はるかに大きく、雲のつぶは、さしわたしが一ミリメートルの百分の一ぐらいで、きりですと、それよりは少し大きい程度です。もともと、雲もきりも同じもので、地面の近くに、低くかかるものを、特にきりといっています。春のかすみも、うすいきりのようなものです。

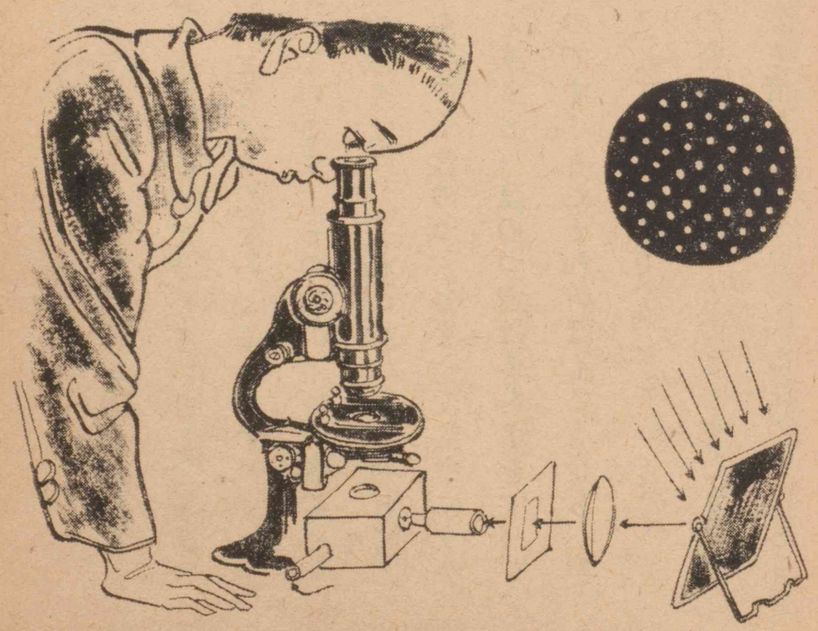
雲やきりは、空気中の水じょう気が、その時のぐあいで、小さな水のつぶの集まりにかわったものです。

この水のつぶのできる時に、必ず何かつぶの「しん」になるものが必要なのです。その「しん」がないと、いくら水じょう気がたくさんあっても、雲やきりはできません。けむりのつぶの中で、とりわけ小さいものは、この「しん」になります。つまり、けむりのつぶのまわりに、水じょう気が集まって、小さな水のしずくができると、これが雲やきりになるのです。

けむりのたくさんでる都会地、たとえば、大阪や東京のようなところに、よくできるのはこうしたわけです。

イギリスの首都ロンドンは、一名「きりの都」といわれるほど、秋から冬にかけて、しばしば、こいきりにつつまれます。これは、あちこちのえんとつから出るたくさんのけむりが、「しん」となって、きりができるからです。

こういう、きりのつぶを集めて、それから水をじょうはつさせると、あとには必ず、何かえんとつから出て来たような



ものが残ります。

都会のきりは、よくこうしてできるものですが、それでは、田園にかかるきりや空にうかぶ白い雲のつぶは、どんな「しん」からできたものでしょうか。

科学者たちは、これは海の塩が「しん」となるのだといっています。

海の上には、昼となく夜となく波が立っています。その波がくだけ散るときに、海水のこまかいしずくがたくさん飛び散ります。これが風にさそわれて、空高くまい上がっていくうちにすっかりわいて、塩のつぶとなって空中にうかんでいます。そこへ水じょう気がたくさん来ると、塩のつぶはまた水をすって、小さい水のつぶとなり、雲やきりになるのです。もしそれがほんとうなら、雲の水を集めてみると、その中に塩がとけこんでいるはずです。

今から二十年以上も前に、ヨーロッパの科学者たちは、このことをしきりに調べていました。特に、ケーラーという科学者は、ヨーロッパの北の方にある、

スウェーデンやノルウェーという、寒い国の山の上に、十年以上もたてこもって研究を続けた結果、雲やきりの水を集めると、必ずその中には、わずかながらも、塩のはいっていることを明きらかにしました。この塩は、もとは海水のしぶきからきたものにちがいありません。

雲のつぶが、何かの理由で大きくなると、重くなって下に落ち始めます。これが雨です。この雨つぶが、高いところから地面に向かっていくとちゅう、ほこりやけむりのつぶにぶっつかると、それをさらっていっしょに落ちてしまいます。

雲の中に飛行機で、ある物質のけむりをまくと、それが「しん」となって、大きな水のしずくができ、それが雨になることが、近ごろアメリカで発見されました。こうして、けむりを使って人工的に雨をふらせることが、できるようになったのです。

わたくしたちは、いま、ものが燃える時に出るけむりが、どんな運命をたどるものか、そうしてそれが雲やきりと、どんな関係があるのかを知りました。こまかいことをいうと、まだまだよく研究してみないと、はっきり言えないこともたくさんあります。しかし、けむりについて、これだけのことがわかるまでにも、世界中の科学者が、おたがいの力を合わせて、長い間、努力を続けてきたのです。

三　あわのじゅ命

あわといえば、だれでもまず消えやすいものと思うでしょう。むかしの人は、あわのことを、「うたかた」といって、世の中のありさまが移りかわっていくことを、「うたかたのごとく」と、たとえています。たしかに、コップやバケツに水を入れた時できるあわは、すぐ消えてしまいます。それでは、水でなくほかの液体にできるあわも、やはり消えやすいでしょうか。よく気をつけてごらんなさい。お茶をちゃわんについだ時にできるあわは、水のあわほど消えやすくはないでしょう。ぎゅうにゅうをかきまぜた時にできるあわは、もっと消えにくいでしょう。しゃぼんのあわにいたっては、とてもじょうぶで、なかなかこわれません。またサイダーやソーダ水のあわは液の表面にうかび出て、すぐ消えてしまいますが、ビールのあわは、なかなか消えないで、表面に白くたまっています。

あわは、たしかに消えやすいものです。しかし、液体の種類によっては、その程度はこんなにちがいます。

学者は、液体の表面にうかび出たひとつのあわが、やがてひとりでに消えてしまうまでの時間を、人の命にたとえてあわのじゅ命とよんでいます。あわの消えやすさは、あわのじゅ命をはかることによって、調べることができるわけです。

それでは、あわのじゅ命を計るにはどうすればいいでしょう。それにはまずさらに液体を入れ、これに細い管をさしこみます。それから、この管をとおして、外から空気を液体の中に送ってやると、液体の中にあわができて、そのあわは、上の方へあがって行って、液体の表面にうかび出ます。そのようすは、左の図を見ればわかりましょう。こうして、ひとつのあわが、液体の表面に生まれ出てから、やがてひとりで消えてしまうまでの時間を計ると、それが、あ

わのじゅ命ということになります。

あわについて、こんな話があります。

だいぶ前のことですが、大学の化学の研究室で、ある学者とそのまわりの人たちは、おさらの中にアルコールを入れて、あわのじゅ命を計っていました。

ところが、みょうなことが起こったのです。さらにふたをした時と、しない時で、あわのじゅ命が大へんちがうのです。ふたをしない時のあわのじゅ命は、なん秒ある

いはなん分といった程度なのに、ふたをするとじゅ命がゼロ、つまりあわが液体（アルコール）の表面に現われたかと思うと、すぐに消えてしまうのです。ふたをするとしないとで、どうしてこんなに、あわのじゅ命がちがうのでしょうか。

おさらにふたをすることは、液体のじょうはつを防ぐことです。ふたをしないと、液体の表面でさかんにじょうはつが起こります。

そこで、この学者はつぎのように考えました。

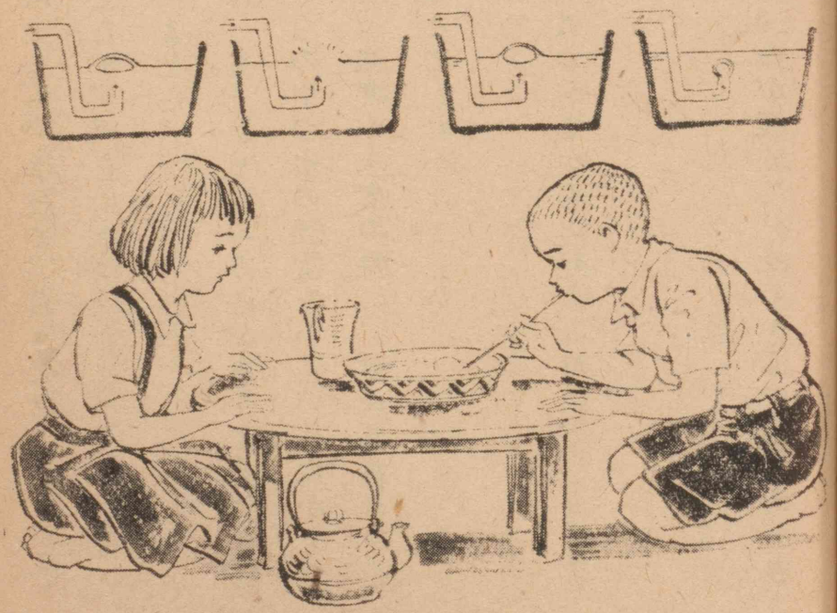
「液体の表面で、じょうはつがさかんに起こる時は、あわのじゅ命が長くなるのではないか。もしそうだとすれば、じょうはつをもっとさかんにしてやると、あわのじゅ命は、さらにのびてくるだろう」。

そこで、さっそくそれをためしてみました。

液体のじょうはつをさかんにするには、その表面に風をふきつけるのが、ひ

とつの方法です。風にあたると、液体のじょうはつがさかんになることは、風のある日にせんたくものが早くかわくことから明きらかです。

実際、下の図のようにして、液体の表面に風をふきつけながらあわを作って、そのじゅ命を計ってみました。すると、じょうはつのないとき、つまりふたをした時、じゅ命がゼロであったアルコールのあわは、風の中では、いつも一分以上のじゅ命を保つことがわかりました。つぎに、



アルコールのかわりに、水で実験してみました。水だと、おさらにふたをしてもしなくても、あわのじゅ命はゼロでしたが、風をふきつけると、一秒ぐらいのじゅ命を保つようになることがわかりました。

液体のじょうはつをさかんにするには、もうひとつの方法があります。それは、液体をあたためてやることです。さらの中の水の温度をいろいろにかえて、あわのじゅ命を計ってみました。すると、温度が八度の時に、ゼロであったじゅ命は、十四度では六秒ぐらいにのびることがわかりました。

こうして、

「あわのじゅ命は、液体の表面でじょうはつがさかんに起こる時に、長くなる」

ことが、確かめられました。

水やアルコールのあわは、もともとじゅ命が短くて、せっかくできたあわも、

じきにこわれてしまいます。それにひきかえ、シャボンのあわはなかなかこわれません。同じあわでも、水のあわとシャボンのあわとは、だいぶようすがちがうようです。

つぎの図のように、おさらの中にうすいシャボン液を入れて、その表面にあわをひとつ作ってみます。このあわはそっとしておくと、いつまでたってもこわれません。しかし、長い間見ていると、あわの大きさが、だんだん小さくなっていきます。そうして、しまいには消えてなくなります。たとえば、初めにさしわたし二センチメートルぐらいのシャボンのあわは、それができてから十時間もたつと、

さしわたし一ミリメートルぐらいにまで、ちぢんでしまうのです。

こういうぐあいに、シャボンのあわはそっとしておくと、水のあわとちがって、パッとはれつすることなく、だんだん小さくなって、ついにすがたを消してしまうのです。

あわの体積の小さくなることは、その中の空気がだんだんぬけてしまうことでしょう。しかし、あわのどこにも、空気のぬけあなはありません。それは、あわを包んでいるシャボン液の、うすいまくをとおして外へしみだしたのです。ちょうど、ゴム風船がだんだしぼんでいくのと、おなじ理くつなのです。ゴム風船の場合も、その中のガス（水素）が、ゴムのまくをとおして外へしみだしていくため、だんだんしぼんでいくのです。

こうなると、大きなシャボンのあわほど、その中の空気がみんなにげていくのに、ひまがかかるわけですから、小さいあわにくらべて、じゅ命が長いこと

になります。

水とシャボン液とで、なぜこんなにちがいが起こるのかという問題は、なかなかむずかしいのです。だいたい、きれいな水よりも、その中に何かとけている方が、よくあわがたち、またあわのじゅ命も長いのです。海の水には塩がとけています。それで、海の水はよくあわがたち、しかも、そのあわのじゅ命が長いのです。海岸に打ちよせる波は、白いあわをいっぱいたてています。その波のひいたあとのすな地には、まだ白いあわの残ってい

るのをよく見かけます。汽船の通ったあとに、白いあわの消え残っている風景も、よく見かけるところです。

都会の中を、よどみがちに流れているどぶ川の水は、いろいろなものをふくんで、きたなくよごれていますが、たくさんのあわがうかんでいのは、みなさんがよく見るところでしょう。

あわは、わたくしたちの生活に、いろいろな役目をはたしてくれます。中でもシャボンのあわは、あかやごみをよくすい取って流してくれるので、いちばんたいせつなあわです。

食物の中にも、よくあわが見られます。たとえば、とろろじるには、あわがいっぱいはいっています。パンをつくる時、粉と水とふくらし粉とをこねて焼くと、あわがいっぱい現われて、焼きあきあがったパンの中に、あわのあとが

残るために、あのようなあなだらけのふかふかしたパンになるのです。パンはあなだらけなので、胃の中にはいった時、胃の液がこのあなにしみこみ、消化を早くするのです。

たまごの白みをかきたてると、とてもよくあわがたちます。それで、かんてんとたまごの白みとさとうとをまぜて、よくかきたてようかんをつくると、あわゆきようかんといわれる白いようかんができます。

だいたい、たんぱくしつのとけている液は、シャボン液のようによくあわがたち、しかもこれがなかなか消えません。たまごの白みも、そのたんぱくしつからできているのです。

ビールのあわが消えにくいのも、その中にわずかながら、たんぱくしつがとけているからです。サイダーやソーダ水には、それがないので、あわができてもすぐに消えてしまいます。ぎゅうにゅうの中にも、たんぱくしつがはいって

います。だから、ぎゅうにゅうのあわは、消えにくいのです。ぎゅうにゅうを冷やして固めたものがアイスクリームですが、それとソーダ水とをまぜて、クリームソーダ水をつくると、ビールのようにたくさんのあわができます。

お台所でもよくあわが見られます。おかまでごはんをたく時、おかまがふいてくると、たくさんのあわができます。この時ふたをとると、あわがすうっと消えていきます。なぜふたをとると、あわが消えるのでしょうか。そのわけは、そうかんたんではありません。

あわについては、まだまだ研究してみないと、よくわからないことがたくさんあります。それをときあかしていくことは、科学者のつとめであり、またこの上もない楽しみともいえましょう。

(四) わたくしたちの言葉

一 おもしろい言葉

ある日の国語の時間である。

先生がおいでになって、今からおけいこが始まるという時、ゆき子さんが立って、

「先生、おもしろいことがあるのです。わたくしはいろいろ考えてみましたが、どうも不思議でたまりません」。

といった。すると先生は、

「おもしろいことって、どんなことかね。まあ、話してごらん」。

と、さも不思議そうにおっしゃった。

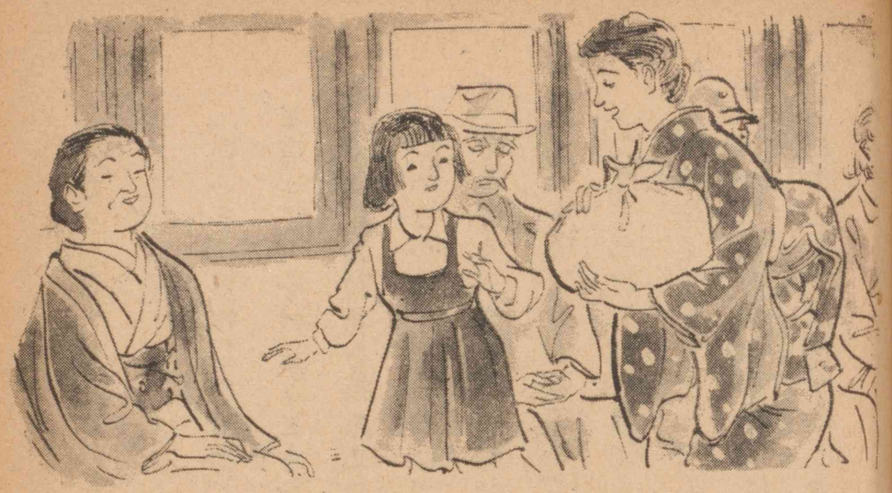
ゆき子さんはうれしそうに、ぽつりぽつりと話しだした。

きのう、電車の中でのことです。その電車はわりにすいていて、わたくしはこしをかけていました。わたくしのとなりにも、ひとりはかけられるぐらいあいていました。

電車が停留所に着くと、ふたりの女の人が乗りこんで来ました。ふたりとも乗るがはやいか、わたくしのとなりの席を見つけて、走って来ました。ひとりは荷物を持っていたために少しおそかったので、席を取られてしまいました。荷物を持った人は、いかにもうらめしそうな顔をして、こしかけた人を見ています。こしかけた人を見ると、

「やれやれ、かけられて助かった」。

と、ひとりごとをいっています。



わたくしは、もうだいぶ前からかけているので、

「おばさん、どうぞ。」

と、荷物を持った人に席をゆずろうとしました。ところが、あんなにかけたがっていた人が、

「いいんですよ、ありがとう」。

といって、どうしてもかけようとしません。すると、さきにこしかけて喜んでいた人が、

「おねえちゃん、子どもだから、かけていらっしゃいよ」。

そういってから荷物を持った人に向かって、

「あなた、どうぞおかけください。お荷物があってたいへんでしょうから」。

と、さっきおしのけるようにして取った席を、ゆずろうとしました。荷物を持った人は、

「いいえ、たいした荷物ではございません。どうぞ、おかまいなく」。

と言って、かけようともしません。すると、

「では、お荷物を持ちましょう」。

といいながら、自分のひざの上にむりやりに取って、ていねいに預かりました。

それからふたりは、前から知っていた人のように、なかよく話し合っていました。わたくしが電車からおりる時には、ふたりの女の人は、

「お気をつけてね、さようなら」。

と、声をそろえて送ってくださいました。

わたくしの席のあとには、荷物を持ったおばさんが、こんどは安心してかけられました。ふたりはきっと、なかよく話して行かれたことと思います。

わたくしは、初めあんなに席を取りあった女の人が、おしまいにはゆずり合うようになったのが、とてもおもしろいと思いました。

ゆき子さんのお話が終るやいなや、まさお君が、

「先生、ぼくにも不思議に思うことがあるのです。お話させてください」。

と、大きな声でいった。

「ほほう。——では、まさおくんのも聞かせてもらおうかね」。

先生は、おもしろそうにこうおっしゃって、いすにおかけになった。

ぼくが不思議に思うのは、「よろしく」という、言葉なんです。

このあいだ、ぼくは学校の帰り道、中山のおばさんにあったのです。中山のおばさんというのは、前にぼくの家のとなりにおられた人です。いろいろお話

をして別れる時、おばさんは、
「まさおさん。お帰りになったらおかあさんによろしくね」。
と、おっしゃったのです。それで、ぼくはうちへ帰って、
「おかあさん。中山のおばさんが、『おかあさんによろしく』。って、おっしゃいましたよ」。
と、聞いたとおりにお伝えしたのです。すると、おかあさんは、
「まあ、そう。どこであったの。おばさんはほかに何かおっしゃらなかった。ほんとに中山さんはいい方ね」。
と、とてもお喜びになったのです。
ぼくはただ、「よろしく」といわれたから、「よろしく」とお伝えしただけなのです。それにおかあさんは、何もかもわかっているように、たいへんお喜びになっているのです。

「よろしく」という言葉には、いったいどんな意味があるのでしょうか。考えれば考えるほど不思議になってくるのです。
先生はにこにこしながら聞いていらっしゃったが、
「どちらも、たいへんおもしろい話だね。少しちがうが、わたくしにもこんな話があるよ」。
といって、つぎのようなことをおっしゃった。
ある日のことです。
学校の仕事がすっかり終って、わたくしは急いで停留所へ行きました。ちょうど、役所や会社がひける時間だったので、どの電車も満員です。一台、二台、三台、——なかなか乗れそうにもありません。

といって、わたくしの家は遠いので、歩いて帰るわけにもいかないのです。しばらくそこで待っている間に、前の家やかべにかけてある、たくさんのかんばんに目がとまりました。黒色の字、赤色の字、大きな字、小さな字、漢字、かたかな、ひらがな、ローマ字、いろいろな文字でいろいろなかんばんが書かれています。

安心して貯金できるみなさんの銀行

よい品を安く売る店買いよい店

ころばぬ先にぜひ保険

わたくしは読むとはなしに、つぎつぎと読んでいきました。すると、今まで気がつかなかったことが不思議にさえ思われるほど、向こうのまどガラスにもこちらの電柱にも、たくさんのかんばんが、さまざまな言葉で書かれています。

間もなく、わりにすいた電車が来たのでそれに乗りましたが、わたくしは、

やはりかんばんに心がひかれて、まどガラスに顔をつけるようにして、えい画のようにうつりかわっていくかんばんをながめていました。

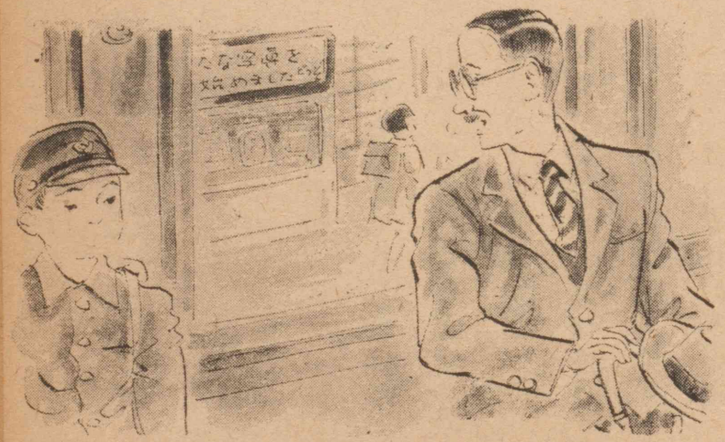
その時、ふとわたくしの心を強くとらえたかんばんがありました。それは、

「へたな写真を始めました。どうぞ。」

という、かんばんです。ちょっと見たところ、目につきそうもない小さなかんばんです。店もそう大きくはありません。しかし、わたくしはたいへんおもしろいと思って、そのかんばんが小さくなって見えなくなるまで、見送ったのでした。

「へたな写真を始めました。どうぞ。」

この言葉は、ほかのどのかんばんの言葉よりも、



不思議に強くわたくしの心をとらえ、今も深く心のおく底にきざみつけられているのです。

みんなはだまって聞いていたが、先生のお話が終るとみちお君が、

「先生、ぼくのうちには、みっつになる妹がいます。だれも教えてやらないのに、このごろ、どんどん言葉を覚えていきます。これは、ぼくたちの言葉を聞いて覚えるのでしょう。ぼくも、おとうさんやおかあさんの言葉を聞いて覚えたのでしょう。おとうさんやおかあさんはまた、おじいさんやおばあさんの言葉を聞いて、覚えられたのでしょう。ところが、このようにして考えていくと、いちばん初めはどうだったのでしょうか。ぼくは、それが不思議なんです。」

と、いった。すると、こんどはいさむ君が立って、

「ぼくは、この冬休みにおじさんのうちへいきましたが、向こうの言葉とこちらの言葉とは、ずいぶんちがっているのです。同じことをいうのに、どうしてちがった言葉があるのでしょうか。」

と、不思議そうにたずねた。先生は、

「ふん、ふん。」

といいながら、聞いていらっしゃったが、

「どれもなかなかおもしろい問題だ。きょうはこれから、わたくしたちの言葉について、いっしょに考えてみることにしよう。」

とおっしゃって、みんなの前にお立ちになった。

それからみんなは、先生のお話を聞くことになった。

二　言葉の話

一

いろいろな学者が、言葉の研究をしています。しかし、言葉のおこりはよくわかりません。それを調べる方法がないからです。

大むかしの言葉は、石などにほりつけてあるもの、本に書いてあるものによって知ることができるのですが、文字に書かれる前にも言葉はあったはずです。ところが、言葉は話すあとから消えてしまうので、文字に写されたもののほかは、知る方法がないのです。

言葉の起こりは、手や足を動かして何かする時のかけ声から始まったとか、うれしい時、悲しい時、おどろいた時などに出す声がもとであるとか、人は生

まれた時から言葉を話すようになっているとか、言葉は神様からいただいたものであるとか、いろいろな説があります。

しかしふつうには、言葉は人間の生活から、自然に生まれ出たものであろうと言われています。つまり、おたがいが生活していく上に自分の思うこと、考えることを伝える必要が起こります。それには絵に書いてするか、身ぶりや手まねによってするとか、さまざまな方法があります。けれども、それよりはもっと自由に、だれでも使うことのできるものがあります。それは声です。

人間は生まれながらにして、声を出すことができます。わたくしたちは、生まれると間もなく声を出します。しかも声は、向こうをむいている人にも、物かげにいる人にも、また、まっ暗な夜でも、相手に伝えることができます。

言葉は、こうした声をあるやくそくによって出し、それをならべて、思うことと考えることを伝えるものです。

わたくしたちが、何か重いものを持つ時や、ひっぱる時力を入れる時などには、「ウン」とか「ヤッ」とか、「オッ」とか、かけ声を出します。また、おどろいた時、うれしい時、悲しい時などには、思わず「アア」とか「オオ」などという声を出します。こうした思わず知らず出る、または出す声がくりかえされるうちに、いつの間にかきまったいい方になったのが、言葉であろうとも言われています。

二

初めはただ、「アア」とか「オオ」をくり返していた人間も、そのうちに「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」だけでなく、それにいろいろな音が加わった、「カ」「キ」「ク」「ケ」「コ」「サ」「シ」「ス」「セ」「ソ」などの音も使うようになったのだろうと思われます。そうして、たとえば、

キ　草や木の「木」
ケ　頭などにはえる「毛」
ト　あけたりしめたりする「戸」

などと、一つの音だけでも、ある言葉を表わすものもありますが、一つが一つの言葉を表わすとすれば、五十では五十の言葉しか使えません。そこでこれを二つ組み合わせて使うこともしました。

アサ（朝）　アキ（秋）　アメ（雨）　イエ（家）

というように、組み合わせたのです。しかし、これでも足りないのでこんどは、

アタマ（頭）　ヒガシ（東）　クルマ（車）　ハヤシ（林）

のように、三つの音を組み合わせることもしました。また、四つ、五つ、の音を組み合わせたり、

アサヒ（朝日）　アサカゼ（朝風）

というように、二つの言葉を組み合わせて使うことも行われてきました。

また、初めあった言葉がもとになって、つぎつぎと作り出されたのもあります。たとえば、「はな」という言葉です。これには、「花」「鼻」「はし」「はじめ」などの意味がありますが、ひとくちにいうと、「はな」という言葉は、とび出しているものをいう言葉です。顔の鼻は、顔のまん中に高くとび出ています。草や木の花も、えだの先に出てさきます。ものごとのはしやはじめは、先に出ている所ということができます。

「はし」という言葉についても、同じことがいえます。この言葉は、川にかけてある「はし」、ものをたべる時に使う「はし」、ふち、へりの意味の「はし」の三通りに使いますが、この三つの間には深い関係があります。「はし」という言葉は、ものごとの「ふち」「へり」を表わす言葉で、川の「はし」は、川の両側、ふちをつなぎ合わせるためにかけたものです。ごはんをたべる時に使う「はし」

は、ちゃわんのものを口へ運ぶものです。二つのものの間に立って、つなぎ合わせをする。——はしわたしをするものです。

このほか、「あか」と「あかい」「あお」と「あおい」といったように、にた言葉で、つながりをもっているものがあります。

「はさみ」は「はさんで切る」

「つめたい」は「寒い時にはつめの先がいたいように感じる」

「きもの」は「きるもの」

「のりもの」は「のるもの」

などと、はじめにあった言葉がもとになって、作り出されたものもあります。

言葉はこのようにしていろいろな方法で、つぎつぎと作られていきますが、国の中で作られるばかりでなく、外国からもとり入れられます。すなわち、外国のものをとり入れる時に、いっしょにはいってくるのです。「ハーモニカ」「リ

ックサック」「メートル」「オーバー」などは外国から来た言葉です。このように、もと外国語であって、今は国語になっている言葉を外来語といいます。

これは、このごろのように外国との交通が開け、ゆききが多くなった時はもちろんですが、ずっと大むかしでもありました。

絵　うま　うめ　たけ　せみ　くま

などがそうです。これでもわかるように、外来語にはもう国語になりきってしまっているために、わたくしたちが日本語だと思っているものも、ずいぶんあります。また、神、酒のように日本語で外国語の中に外来語としてはいっているものもあります。

わたくしたちの生活には、たくさんの言葉が必要です。したがって、言葉は、このほか、さまざまな方法で、どんどん作られていきます。

わたくしたちは毎日、いろいろな言葉を使っています。これらはいずれも、

祖先の人たちがその必要によって、いつとはなしに作りあげてきたものです。それをその子孫が受けついで、これを使い、そのならわしをその子孫に伝えてきているのです。

何も知らないあかちゃんが、毎日どんどん覚えていく言葉は、おかあさんやあかちゃんのまわりの人々の間にできているやくそくです。あかちゃんはこのやくそくを覚えていくことによって、だんだんりっぱに言葉が使えるようになるのです。

三

わたくしたちは、ずっとむかしからある日本語の中に生まれて、その中で育ってきたので、ひとりでにそのやくそくを習い、そのならわしを守っています。たとえば、むかしは「塩」を「シホ」、「はえ」を「ハヘ」などといっていましたが、現在では「シオ」、「ハエ」というように発音がかわっています。

ところで、言葉はむかしから今日までずっと続いていて、少しもかわらないかというとそうではありません。時代とともにかわっています。現在もかわっています。その発音はもちろん、ひとつびとつの言葉もたえず少しずつかわっています。

また、ひとつの言葉についていうと、むかしは必要であった「あんどん」などという言葉は、今はほとんど必要がありません。そのかわり「電燈」という

ようなむかしなかった言葉が使われてきました。

中には、むかしあったことやものので今日ではないのがあります。したがってそれを表わす言葉は、古い本を読む学者などのほかは、用がなくなります。すると、それらの言葉は、世間からすがたを消します。反対にむかしなかったものので、新しくできたものがたくさんあります。それらには名前がいりますから新しい言葉がつぎつぎと作られていきます。えい画、ラジオ、ジープなどいくらでもあります。

このようにして言葉は、たえずかわっています。新しいものと古いものとの入れ代わりが、たえず行われています。生きものと同じように、たえず生まれて大きくなり、年をとって死んでいきます。

また言葉は、意味のかわっていくことがあります。たとえば、「こわい」という言葉は、もとはこわばったようなことを言い表わすやくそくでした。ところ

が、同じ言葉を使っていた人間が、はなればなれに住んでいる間に、ある地方では、おそろしいものにあって、からだがこわばったような気持の時に使って、「おそろしい」という意味になりました。ある地方では、からだの肉がかたくなったありさまの時にばかり使って、「くたびれた」という意味になったのです。言葉はこうしてたえず動いています。流れる水のように、たとえそれが少しずつであっても、いつも動いているのです。

四

言葉は地方によって意味のかわることがあるばかりでなく、発音や言葉そのものも、ずいぶんちがっていることがあります。

わたくしたちは汽車の旅をして、よくこんなことを経験します。それが長旅であったりすると、つかれのためについうつらうつらとねむってしまうのです

が、ふと目をさましてみると、あたりのようすがすっかりかわってしまって、

「ああ、遠くへ来たんだな。」

と、しみじみ感じます。ぼんやり外の景色を見るとはなしにながめていると、旅の思いがむねの底にまでしみとおってきます。ふと気がつくと、今まで聞きなれていた言葉はあとかたもなくなって、まるでちがった耳なれない言葉にかわっているのに、いいようのないさびしさを感じたりします。

「うちゃあ、はあ　とっても　はしるんよ。」

こんな話を聞き取ることができても、いったい

どんなことを言っているのか、初めての者には見当がつきません。よくよく考えた末、あの人は「走るのが早いとじまんしているのかなあ」などと思ったら大ちがいで、とんだわらい話をまき起こすことになります。それもそのはずです。これは、「わたくしはとても歯がいたいんですよ」という意味なのです。

こんなふうに、わたくしたちが旅先でめんくらったりする、その土地特有の言葉を方言といいます。方言は悪い言葉だと考えている人があるかも知れませんが、そうとはいえません。町にも方言があります。

わたくしたちが旅から帰って、駅でその土地の言葉を聞くと、なんだかほっとします。方言の親しさが、わたくしたちの心をやわらげてくれるのです。

ふるさとのなまりなつかし停車場の人ごみの中にそを聞きにいく

こんな歌がありますが、これはわたくしたちが、ふだん使いなれている言葉のなつかしさをいったものでしょう。

方言には、その土地の人々の心がこもっています。長い間のくらし方や、考え方がにじんでいます。それらが心のふるさととして、今のわたくしたちのむねをあたためてくれるのです。

しかし、言葉が土地によってちがうということは、一面こまることがあります。そこで、日本人ならだれが聞いても、どこで話してもわかる言葉が必要になってきます。これがひょうじゅん語といわれるものです。

ところが日本には、まだ、ひょうじゅん語ができているとはいえないのです。ひょうじゅん語らしいものが、できかかっているというのが正しいでしょう。そこで、これからみんなで、ほんとうのひょうじゅん語を作っていかなければなりません。そのためには、めいめいが毎日使っている言葉をよく考えて、それをみがきあげ、たしかで、美しい言葉にすることを心がけることがたいせつです。

(五) 母の物語

一　母の思い出

（一）

青山の家は、ささやかなすまいであった。小さい庭のすみに、もみじの木が一本はえていた。

母は、家の中の用事をすませると、夕ぐれの庭にいすを出してすわり、わたくしをひざの上にのせた。そして、母と子は、やがて新聞社から帰ってくる父を待つのだった。

母の白い手がうすやみの中にういて、わたくしをささえた。

母は学校のころに習った歌だといって、「庭の千草」や「夕空晴れて」や「ほたるの光」を、美しい声でなんべんもうたって、わたくしに教えた。母は、かるい気持で歌をうたう時ですら、なみだを大きな目ににじませるくせがあった。わたくしは母にだかれたまま、母の顔を見つめて、美しい歌声を聞いていた。

青山の夕ぐれはすばらしかった。

空気はすみ、あたりは静かで、こっこくと自然は色をかえ、形をかえていった。

数わの鳥が、あわただしく大空を飛び去っていった。それがわたり鳥であるということも、母からおそわった。

母は、自然が詩のように美しいことを、わたくしのおさない心にしみこませた。

（二）

「わたしには、どうも想像力っていうものがなくってね」。と、母はよくいったものです。

「想像力がない」と言ったのは、それは、小説を作るというようなことだけをいうものと思っていたからです。母は、自分では知らずにいるのですけれど、文章では書き表わせないような、すぐれた想像力を持っていたのです。

母は、いつも家の中の用事にかかりきりでした。しかし、物の考え方には、どことなくおもしろいところがあったので、家の中のつまらない仕事も活気づきました。ストーブやなべや、テーブルやコップや、そういうものに命をふきこみ、話をさせることができました。母は、お話のじょうずな作者だったのです。

母は、いろいろな話をして、ぼくを楽しませてくれましたが、自分では、なんにも考え出せないと思っていたものですから、ぼくの持っていた絵本の絵をもとにして、お話をしてくださったものです。そのお話のひとつに、こんなのがあります。

大きなこどもの失敗

ロジェとマルセルとベルナールとジャックとエチエンヌの五人の兄弟は、お友だちのジャンの家へ行こうと思って、なかよくそろって、国道へ出ました。国道は日に照らされて、きいろいきれいなリボンのように、牧場や畑にそって、村から町へ、町から海へと続いています。

ふざけないで歩くこと、道草をしないこと、うまや車に注意すること、五人のうちでいちばん小さい、エチエンヌのそばを決してはなれないことなど、お

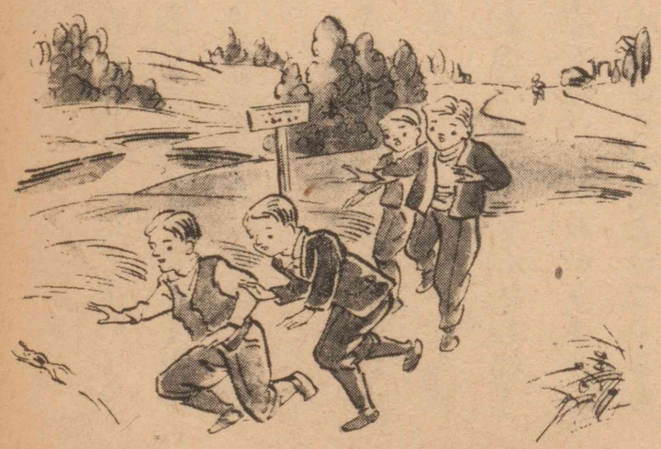
かあさんにしっかりとやくそくをしたので、お許しが出たのです。

五人は一列になって、きまり正しく進んでいきます。初めのうちは、とてもりっぱでした。しかし、この列には、ただひとつだけこまることがあります。それは、エチエンヌが小さすぎるのです。

エチエンヌは、いっしょうけんめいに足をはやめます。短い足をできるだけ大きく開きました。その上に、両手をせっせとふりました。が、なんといっても小さすぎます。どうしても、にいさんたちについて歩けません。だんだんおくれてしまいました。にいさんたちは、自分の足に合った歩き方をします。かわいそうなエチエンヌも、やっぱり自分の足に合った歩き方をします。調子がそろうはずがありません。エチエンヌは息をきらして走ります。声を出します。それでもおくれてしまいます。にいさんたちは、エチエンヌのおくれるのにかまわず、どんどん進んでいきます。

ところが、前を歩いていたにいさんたちは、急に立ち止まりました。道の上をとんでいる一ぴきのかえるを見つけたのです。かえるは道ばたの草原へいこうと思って、ぴょんぴょんとんでいきます。その草原はかえるの国です。かえるのたいせつな国です。そこの小川のそばにかえるの家があるのです。

緑色のかえるは、ちょうど青い木の葉がとんでいくようです。ベルナールとロジェとジャックとそうしてマルセルとは、その後を追いかけました。あまりむちゅうになって、エチエンヌのことも、きれいな道のことも、おかあさんとのやくそくもわすれてしまいました。もう、四人は草原の中へはいっています。しばらくすると、草が深くしげ



っているやわらかい土の中へ、足がめりこんでいくのを感じました。それでも少し行くと、おしまいには、ひざのところまで、どろの中にはまりこんでしまいました。草がしげっていて見えなかったのですが、そこはぬまになっていたのです。

四人は、やっとのことでそこから足をぬきました。くつも、くつしたもまっ黒です。みんなはこまってしまいました。

そこへ、エチエンヌは息をきらして追いついて来ました。にいさんたちの、まっ黒になった足を見ると、喜んでいいのか、悲しんでいいのかわかりませんでした。そうして、大きな人や強い人には、たいへんなことが起こってくるものだと、いろいろ考えました。

足がまっ黒になった四人は、そんなかっこうをして、お友だちのジャンの家へ行けないものですから、いま来た道を、しおしおとひき返していきました。

二　母への手紙

パリー・千九百七年五月二日

おかあさん、ただいま夜の仕事を終りました。これから、おかあさんのそばで、きょうの日を終りたいと思います。

おとうさんのおはかの図面は見ました。たいへんよくできています。わたくしの想像していたのとだいたい同じでした。すっかりできあがるのはいつごろでしょうか。お知らせください。

おかあさん、おかあさんのことを思わない日は一日もありません。どこにいても、町でも、役所でも、友だちといっしょの時でも、うちにいる時でも、その場のこと

はさしおいて、わたくしは心からおかあさんのことを思います。どうか、おかあさんが決しておひとりではないことを、わすれないでください。

わたくしは、また新しい本にかかっています。それは、おとうさんのことを書いてみようと思っているのです。このことは、まだお話していませんでしたね。ほんの手をつけたばかりですが、わたくしは、一歩一歩、おとうさんと同じ生がいを歩いています。まるで、おとうさんといっしょにくらしているような気がします。おとうさんのお考えなり、ものの見方なりが、ありありと思い出されるのです。おとうさんから聞いたことも、わたくしは残らず思い出します。あとに残ったわたくしのむねに、これほどの思い出が残っている間は、まだおとうさんは、おなくなりになっているとはいえません。

おかあさん、おかあさんはいつか、わたくしがまだ小さいころ病気などで苦しんでいると、自分もいっしょになって苦しんだとお話になっていましたね。

そんなことを聞くたびに、わたくしは、おかあさんがいっそうすきになるのです。この前、「母と子」を書いているころ、わたくしはその話をなつかしく思い出しました。おかあさんはわたくしにとって、世界中でかけがえもないたいせつな方であると、わたくしは、いつになっても言いきることができます。

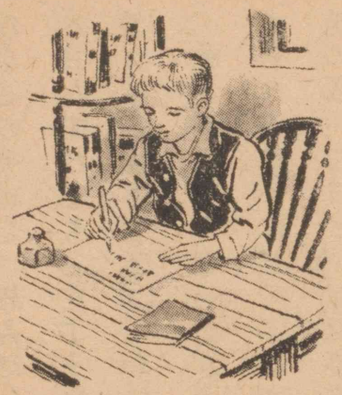
やさしいなつかしいおかあさん、さようなら。これからすぐに休みます。このごろは毎日、天気もはっきりいたしません。こんばんも、また雨がふっています。

おかあさんのお心に、あらゆるなぐさめをお送りしたいと思います。

ルイ

○

パリー・千九百七年六月二十八日



なつかしいおかあさん、日曜日の朝お手元に届くように、このたよりを書き

ます。おかあさんは、わたくしのことをお考えくださるでしょう。いくどもわたくしの手紙を、読み返してくださるでしゃう。そうして、わたくしがちょっとおたずねでもしたような気持におなりのことでしょう。そうすれば、ひとりぼっちではなくなってくださるでしょう。

急ぎの用でもないかぎり、わたくしの手紙の届いた日に、すぐお返事をくださらないようにしてください。そうすれば、一週間に二日だけ、わたくしの手紙の届いた日と、お返事をくださる日と、おかあさんのお心もいくらかまぎれることでしょう。

おからだをたいせつにしてください。おかあさん、お気にいることはなんでもなさらなければいけません。遺産の分配については、九月にまたお話しいたしましょう。今では、わたくしは何もほしくはないのです。

いくどとなく、おとうさんのことを思い出します。でも、できるだけ勇気を

失わないように心がけています。わたくしたちは、いつかは死ななければならないのです。そしてわたくしは、おとうさんのように、自分の運命をりっぱになしとげてこの世を去った人たちを、うらやましいと思います。人生についてのわたくしの考えは、すっかりかわりました。前にはかるがるしく見ていたことを、いまではまじめに考えるようになりました。おとうさんは、決してなまけ者ではなかったと思うと、仕事にもいっそう勇気が出ます。おとうさんの生がいがどんなにまじめであったか、そのお考えがどんなにしっかりしていたかと思うと、多くのむだな楽しみを、わたくしはわすれてしまいます。そんなものに、今までのようなねうちは、もはや考えません。おとうさんのお考えを、わたくしは受けついでいます。おとうさんは、おなくなりになったのではないような気持がします。

おかあさん。わたくしは、毎日おかあさんのことを思います。どうかお元気

でおくらしください。もし、病気にでもおなりの時は、すぐわたくしにお知らせください。わたくしは、おかあさんのおそばをはなれずくらしたいと思います。おかあさんのありのままを目にうかべ、おかあさんが何をなさっているかが想像できないとこまるのです。わたくしは、ごいっしょにくらしているようなつもりでいます。さびしい時には、ただ、わたくしの方へ目をむけてくだされば、いいのです。そうすれば、わたくしの心がおかあさんを愛する心でいっぱいであることが、きっとおわかりになるだろうと思います。

なつかしいおかあさん、わたくしの真心を、残らずお送りします。

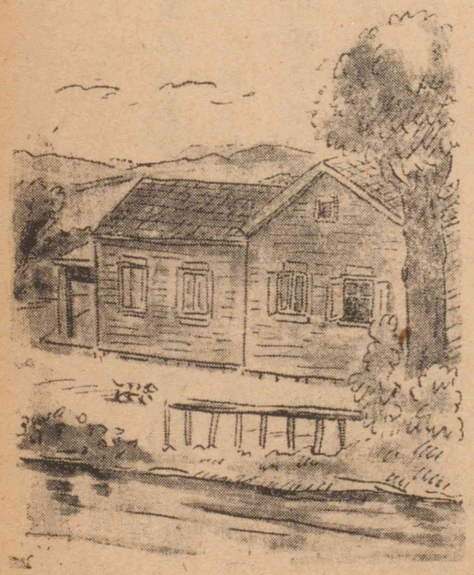
ルイ

○

パリー・千九百七年十月十五日

なつかしいおかあさん、もうすっかり新しいすまいにおちつきました。ひじ

ように静かなのと、ながめがいいのと、広々としているのとで、たいへん気にいっています。この家の写真を二まい送ります。ただこれはわたくしのものではありませんので、お返しを願います。わたくしのへやがどこにあるか、どうすればうまく説明できるでしょうか。正面の左手の家をごらんください。すると、屋根の下に左の方から数えて、四番目のまどがお目にとまるでしょう。開いたまどです。それが、わたくしのねるへやのまどなのです。そのつぎに、小さなまどがあるでしょう。台所のまどです。そしてそのつぎに、やはり開いた大きなまどが見えるでしょう。この三つが、わたくしのすまいのまどなのです。わたくしのまどからは、緑の木々とセーヌ川とだけしか見えません。パリーにいるよ



うな気持はしないのです。

写真は、十日ばかりして、こんどのお手紙の、そのつぎのお手紙の時にでもいっしょにお送りください。

おかあさん、わたくしは、あい変わらず仕事にせいだしています。このごろは、すっかり家におちついています。毎朝役所の勤めに出かけるほかは、ほとんど町へ出かけません。写真の下の方に見えている船に乗って出かけます。ちょうど、わたくしのすまいの入口の前にあるのです。

ゆうべお手紙を書こうと思っていますと、友だちがたずねて来たので、とうとうきょうになりました。たびたびお手紙をさし上げましょう。少なくとも十日目ごとには、こうしておたがいにたよりをおこたらなければ、わたくしたちがはなれてくらしていることも、苦にならないと思います。

わたくしの心のありたけで、おかあさんを愛しています。　ルイ

三　母の力

（一）

中津の町に、どこからともなく風のように、こじきがやって来ました。破れた着物をまとい、頭のかみはぼうぼうにのび、その上、なん日もお湯にはいったことがないらしく、あかによごれたからだをしていました。だれいうとなく、「たけ。たけ」と、よんでいましたが、毎日ぶつぶつとひとりごとをいいながら、朝からばんまで町の中をいったり来たりしていました。

ある朝のことです。「たけ」が、諭吉の家の前を通りかかりました。

諭吉の家は古くから続いている家でしたが、おとうさんの勤めのために、家族の者もいっしょに大阪に住んでいました。諭吉が生まれて一年あまりたったころ、おとうさんは病気がもとでなくなりました。おかあさんは一時はこまっ

てしまいましたが、気をとりなおして、諭吉をせおい四人の兄や姉も連れて、きょうりの中津へ帰っていきました。しっかりした家とはいえ、貧しい生活で、おとうさんがなくなったあと、おかあさんは五人の子供を連れて、毎日、家の用事から子どもの世話まで、かかりっきりで働かなければなりませんでした。その上、町のようすがわからず、言葉のちがうところもあり、不自由な生活が続きました。

この朝も、おかあさんは早くから起き家を整理し、子どもといっしょに食事をすませたあとは、日あたりのいいえん側で、はり仕事にせいだしていました。諭吉は、おかあさんの見える中庭で遊んでいました。

仕事につかれたおかあさんが、手をやすめて通りを見ているところへ、ちょうど、「たけ」が通りかかったのです。

おかあさんは、すぐに走り出て、

「おたけ、こっちにはいっておいで。」

と、やさしく声をかけてやりました。「たけ」は、びっくりしたように、しばらく立ち止まっていましたが、にやにやとわらいながら、庭の中へはいって来ました。

「まあ、かわいそうに。」

と、おかあさんは悲しそうな顔をして、「たけ」の頭から足の先までながめていました。そして、

「諭吉、おけに水をくんで来ておくれ。」

といって、「たけ」を庭の草の上にすわらせ、自分はたすきがけに身ごしらえを始めました。諭吉は、おかあさんは何をなさるのだろうかと、不思議そうな顔をして見ていると、おかあさんは、

「早くくんで来ておくれ。頭のかみをきれいにしてあげるのですから。」

と言い終ると、もう、「たけ」の頭のかみをすきを始めました。

諭吉は、おかあさんの気持が不思議でなりませんでしたが、言いつけ通りに、いどからおけに水をくんで来ました。おかあさんは、くしをなんどもあらいながら、「たけ」のかみの毛をきれいにすいていきます。「たけ」は、にやにやしながら、気持よさそうにじっとしています。

頭のかみをすき終ると、こんどは、着物の破れをぬい始めました。前からうしろから、おかあさんは、なれた手つきで大きな破れをぬっていきました。すっかり終ると、いままでの「たけ」とは見ちがえるほど、きれいになりました。

「さあ、きょうはこれでおしまいよ」

といいながら、おかあさんは立ちあがって、着物をはらい、手をぬかであらいました。諭吉がおけの水をすてて、やれやれと思っていると、おかあさんは、

「きれいにさせてくれたお礼ですよ」

といって、「たけ」にごはんを食べさせました。

いやな顔は少しもしないで、かえって楽しそうに「たけ」の世話をしているおかあさんのようすを見ていた諭吉は、あたたかい思いやりの心にうたれてしまいました。

（二）

そのころ、日本の国は外国とのゆききが少なく、長崎や下田などにときどきくる外国の船が、いろいろとようすを知らせてくれるほかは、少しも外国のことがわかりませんでした。古くからのしきたりのまま、ねむっていたのです。

農夫の子どもは、どんなにすぐれていても農夫になるよりほかはなかったし、商人の子どもは、やはり商人になるよりほかに方法はなかったのです。自分の力によって、どこまでものびていくということは、ゆめにも考えられませんでした。

同じように人間に生まれていながら、自分の考えによって生きていくことができないということは、ほんとうに悪いことです。おかしいことです。人間はだれでも、どんな仕事をしていても、みんな尊い命を持っています。りっぱな人格を持っています。

そのころの人々には、それがわからなかったのです。

（三）

諭吉のおかあさんが、こじきの世話をしてやり、ごはんまでも食べさせてやったという評判は、すぐ町中にひろがりました。

「なんという、おかしなことをする人だろう」。

「気でもくるったんじゃないのかな」。

と、かげぐちを言う者がでてきました。しかし、おかあさんには、かげぐちが耳にはいるのかはいらないのか、今までと少しも変わりません。そののちも、たびたびこじきの世話をしてやりました。

それだけでなく、諭吉の家にではいりする農夫や商人たちにも、別に、ばかにもしなければいやがりもせず、ていねいな言葉で気持よく話しかけてやりました。

「ほんとに、やさしい人だ。」

「情深い人だ。」

「初めて、人間らしい人を見た。」

という評判も、あちこちで聞かれるようになりました。

しかし、諭吉のおかあさんは、そんな評判はどうでもよかったのです。おとうさんのなくなったあと、苦しい生活の中から、どうかして五人の子どもをりっぱに育てなければならないと、ねてもさめても思いなやんでいました。おかあさんの気持が子どもに通じるのか、さびしく苦しい中にも、家の者はみんななかよくくらして、楽しい毎日が送られていきました。

いつものように、こじきをきれいにしてやったあとのことです。

おかあさんが、

「諭吉、感心によくてつだってくれるね。きたないと思わないかい。」

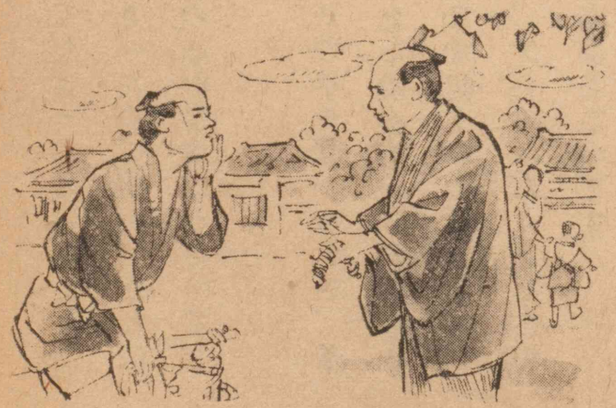
と、たずねました。諭吉がだまっていると、言葉をついで、

「どうしてこじきになったのか知らないけれど、ほんとに不幸な人ですよ。破れた着物をまとい、あかによごれたからだはしているが、かわいがってやりましょう。なくなったおまえのおとうさんはね。」

と言って、おとうさんのことを話して聞かせました。

大阪にいたころのことです。大阪では、まん中にあなのあいた青銭が使われていました。青銭一まいを一文といい、九十六まいをぜにさしにさして、九六の百文といって、さしのまま使うのがふつうでした。これは、きちんと九十六まいなくても、一まいや二まいの多い少いはたいした問題にしないで、さしの長さを目測するだけで、一さし百文として通っていました。

ある日、おとうさんはぜにさしから青銭を二三まいぬき取って、あとはそのままにして町へ出かけました。夕方、家に帰ってみると、そのさしが見つかりません。家の者にきくと、それ

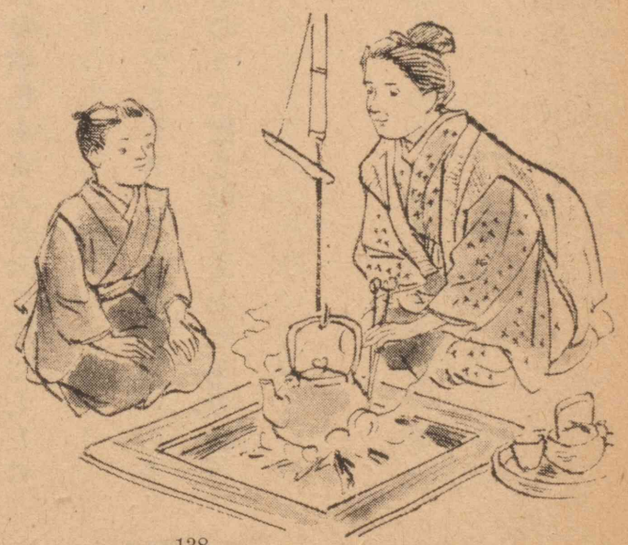


を九六のぜにさしと思いこんで、さかなやにはらってしまったといいました。
おとうさんはびっくりして、そのさかなやの名をきいたのですが、それは、いつもではいりするさかなやではなく、通りがかりのさかなやだったので、家の者は、だれひとりも知っていません。
おとうさんは、たいへん心配されて、そのさかなやの年や顔かたちや、着ていたものや荷物のようすまでもくわしく聞き、人をたのんで三日の間もさがし、やっと、そのさかなやを見つけました。さかなやにそのわけを話し、足らなかった五文か十文かのお金をはらい、その上、少しではありましたが、お金をたしてやり、自分の不注意であったことをおわびしたのです。
他人が聞くと、わずか二文や三文のことで、さかなやにあやまったといって、わらうかも知れないが、おとうさんの心がけのりっぱなのには、おかあさんは感心してしまいました。

話し終ったおかあさんは、その時のことをなつかしく思い出すかのように、しばらくだまってしまいました。
諭吉はおとなしく聞いていましたが、強く心に感じたのか、顔に感動の色を現わしてうなずきました。おかあさんも、諭吉の顔色をよみとって安心したのか、にっこりとしました。
おかあさんは、諭吉がおとうさんのおもかげを少しもきおくしていないのをかわいそうに思い、なんとかして、おとうさんのりっぱな教えをわからせようと、努力したのです。
また、ある寒い冬の日のいろりばたで、
「諭吉、おまえにどうして諭吉という名前をつけたのか知っていますか。それはね。」
といって、おかあさんは、ぽつりぽつり話し始めたことがありました。

おまえのおとうさんは、学問のすきな人で、よく本を読んでいました。まえまえからほしいと思っていた本が手にはいってたいへん喜んでいる時に、おまえが生まれたので、その本の名の一字をとって、『諭吉』としたんですよ。

おまえが生まれると、おとうさんはお喜びになり、『これはいい子だ。だんだん成長して十か十一になれば、寺にやって、おぼうさんにしよう。』と、ロぐせのように話されていましたよ。わたしは、おとうさんが、どうしておまえをおぼうさんにするとおっしゃったのかわからなかったが、もし、おとうさんが生きていらっしゃったら、おまえは、おぼう



さんになっているはずですよ」。

と、諭吉の頭をなでながら、にこにこしました。

諭吉にも、どうしてぼうさんにするとおっしゃったのか、おとうさんの気持はよくわかりませんでしたが、しっかり勉強して、おとうさんのようなりっぱな人にならなければならないと、心にかたくちかいました。

諭吉はだんだん成長するにつれて、おとうさんが、寺のぼうさんにしておくと、自分が努力して勉強すればするだけどこまでも進んでいくことができるから、いちばん末の子の諭吉を、力のあるかぎりのばしてみようとお考えになっていたことが、はっきりとわかりました。諭吉は、おとうさんの深い愛情に心をうたれ、また、その時代の悪いしきたりについていろいろと考えていたおとうさんの、すぐれた考え方におどろいてしまいました。その時、諭吉の心に、悪いしきたりがどんなに強くひびいていったことでしょう。

こうして、おかあさんは、食事をする時や、仕事のひまに、また、いっしょにねながらそのまくらもとで、おとうさんの教えやおこないを、いろいろと話して聞かせました。

なくなったおとうさんのりっぱな人格は、おかあさんの話を通して諭吉のむねにしみこんでいき、そのたびに、諭吉は心をふるいたたせました。

（四）

この諭吉こそ、のちの福沢諭吉で、新しい日本が生まれようとした明治の初め、古くからの悪いしきたりを打ち破り、明かるくて自由な世の中をつくろうと努力した人であります。

独立自尊の旗をかかげ、西洋のすぐれた

文化をとりいれ、大学をつくり、たくさんの書物も書き、新しい日本を導いていったのでした。

いま、日本では、再び新しい日本をつくろうと、みんないっしょうけんめいになっていますが、福沢諭吉は、八十年も前に、そのさきがけをした人だといえましょう。

諭吉は、明治三十四年二月三日、数多くの功績を残して六十八才でなくなりました。

お仕事の手引

(一) 働く人々

1 「働く人々」のところには、特別の言葉や新しく出た漢字が、たくさんあります。ノートに書き出して研究しましょう。(おわりの言葉や漢字の表を使いなさい。)

2 みなさんは、もう、字引を使うことができますか。字引にはいろいろありますが、ふつう、言葉をもとにした辞典と、漢字をもとにした字典とがあります。

字引のひき方を研究しましょう。

(イ) 辞典

○ 言葉をどんな順序にならべているか調べましょう。(おわりの言葉の表も考えてみましょう。)

○ 五十音のひき方になれましょう。

(ロ) 字典

○ 漢字をどんな順序にならべていますか。

○ 漢字の部首の研究をしましょう。

「亻」にんべん　「扌」てへん

「艹」くさかんむり「宀」うかんむり

「广」まだれ　「疒」やまいだれ

「气」きがまえ　「門」もんがまえ

このほか、知っている部首を書いて研究しましょう。

3 「一」「二」「三」は、「燈台」「新聞社」「炭こう」と、それぞれ働く場所はちがいますが、三つとも同じ点が考えられます。

それは、働く□□□□です。

4 「一」と「二」と「三」とを比べて、ちがう点を研究しましょう。それは大きく二つに考えられます。

○ 書く材料がちがいます。

○ 書き表わし方がちがいます。

(イ) 書く材料のちがう点

	いつごろ	場所	何を	だれが
一				
二				
三				

(ロ) つぎのことを手がかりにして、書き表わし方がちがう点を研究しましょう。

○「であります。」か「である。」か、文の結び方のちがい。

○ ふつうの文か、会話の文かのちがい。

○ 説明した文か、みたままの文か、さらに、作者の心の動きも書き表わした文かのちがい。

5 「燈台を守る人」「新聞社で働く人」「炭こうで働く人」それぞれ、どんな役目をもって、どんな仕事をしているのか、ノートに整理しましょう。

(二) 読書会

1 読書会の三つの文章は、初めが手紙、つぎに会話を主としたもの、つぎに会話だけで組み立てられたげきという順序になっています。どうして、こんな順序にしたのか、三つはどういう点がちがっているのかなどいろいろに調べてみなさい。

2 おじさんの手紙には、いろいろなことが書いてあるが、そのだいじな点をまとめて、ぬき書きを作ってみましょう。

3 読書のめあて、読書の方法について、自分

の考えていること、実際にやったことなどをくわしく書いてみなさい。

4　自分の感心した本や、物語について、友だちと話し合いをしてみなさい。

5　読書をする時には、読みっぱなしにしないで、読書帳とかカードを作ることがだいじです。

読書カード

本の名　少年少女　読んだ日　二五、四、五
作　者　アナトール・フランス
ここにあらすじや感想や、だいじだと思ったところのぬき書きなどを書いておきます。

この読書帳や読書カードは自分の使いやすいようにくふうして作りなさい。

6　これから自分たちの学級に、学級文庫を作っていくのにはどんなにしたらよいか、また、今ある学級文庫をもっとりっぱにしていくにはどうしたらいいか、友だちと話し合ったり、自分の意見をまとめてみましょう。

7　学級文庫と学校図書室の関係を、うまくつけていくのにはどんなにしたらいいか、研究しなさい。

8　学級文庫のげきについて、つぎのようなことを研究してみましょう。

○　学級文庫をよくしていくのにはつぎのどれとどれがだいじでしょう。

自分のすきな本をどんどん読む。
借りた本はたいせつにとりあつかう。
本の破れたところをしゅうぜんする。
かってに本を取り出して読む。

○　このげきには美しい場面がいくつかあります。どことどこか話し合ってみましょう。

○　学級文庫のげきをじっさいにやるのには、どんなところに注意したらいいでしょうか。

○　原という子は、すなおな少し気の弱い子のように思われますが、それがどんなところに現われているでしょうか。

○　このげきをもとにして、自分たちの学級文庫で起こった問題などをいれて新しいげきを作ってごらんなさい。

9　このげきを物語に書きかえてみなさい。そうして、どこがなおしやすく、どんなところがなおしにくいか研究してみましょう。

(三)　自然を見つめて

1　わたくしたち身のまわりには、いろいろなことがらがあります。目に見えるもの、耳に聞こえるもの、それはなんの不思議もないようですが、この文を読むと、おどろくことがたくさんあります。自然の見方を学ぶことがたいせつです。

2　作者が自然研究を一生の仕事に選んだわけを、文章から書き上げてみなさい。この文で、たえずうつり変わるものはなんでしょう。また、いつも変わらないものはなんでしょう。

3　「けむりのゆくえ」がよく読めたら、つぎの問題がひとりでにとけます。

(イ)　けむりの正体はなんでしょう。

けむりのつぶ　固体——どんなけむりか
　　液体——どんなけむりか

(ロ)　けむりが消えるように見えるのはなぜでしょう。

けむりのつぶのうち、大きいものは、けむりのつぶのうち、小さいものは、

(ハ)　湯気とけむりは、同じですか、ちがいますか。

(ニ)　雲やきりとけむりは、どんな関係があるのでしょう。

きり｛都会のきり——何がしんになるか、
田園のきり——何がしんになるか、

(ホ) 人工的に雨をふらせることができるというが、どうするのでしょう。
また、自由に雨をふらせることができたら、この世の中に、どんな便利をあたえるでしょう。

4 「あわのじゅ命」を読んで、つぎの仕事をしてみなさい。
(イ) いろいろのあわを書き上げなさい。
(ロ) あわのじゅ命を計るには、どうすれば良いでしょう。
(ハ) あわのじゅ命を長くする方法をあげてみなさい。

5 つぎのあわを比べて、じゅ命の長いものに、○をつけなさい。
水のあわ　ビールのあわ　サイダーのあわ
とろろじるのあわ
ぎゅうにゅうのあわ

6 あわは、わたくしたちの生活に、役に立つでしょうか。役に立つとしたら、どんなあわがどんな役に立つか、説明しなさい。

7 この課のような文を、説明文といいます。この文は、やさしく、わかりやすく、なかなかじょうずに説明してあります。わかりやすくするため、どんなくふうがしてありますか、文の順序と、言葉の使い方の二つの方面から調べてみなさい。

(四) わたくしたちの言葉

1 「おもしろい言葉」のところを読んで、つぎのことを考えましょう。
○どこがおもしろいのでしょうか。
(イ) ゆき子さんの話

(ロ) まさお君の話
(ハ) 先生の話
また、そのわけも考えましょう。
○言葉は、不思議な力を持っています。みなさんにも、「言葉の不思議な力」を感じた経験があったら、みんなで話し合いましょう。

2 「言葉の話」のところを読んで、つぎのことを調べましょう。
○言葉はどうして起こりましたか。
○言葉はどうしてつくられていきましたか。
また、「言葉はこのほかさまざまな方法でどんどんつくられていきます。」とありますが、このほかにどんな方法でつくられているでしょう。みんなで考えてみましょう。
○「言葉はたえず動いています。流れる水のように、たとえそれが少しずつであっても、いつも動いているのです。」とありますが、これはどんなことを言ったものでしょうか。
○どうして方言ができるのでしょうか。また、なぜひょうじゅん語が必要なのでしょう。ひょうじゅん語をつくりあげていくためには、わたくしたちは、どんなことに気をつけねばなりませんか。

3 「言葉集め」をしましょう。
○自分でおもしろいと思うかんばんの言葉を集めましょう。
○「ウン」とか「ヤッ」のように、何かのはずみにでる、短い言葉を集めましょう。
○四つ、五つの音を組み合わせてある言葉を、さがしてみましょう。
また、こんな言葉が少ないわけも考えましょう。
○外来語を集めましょう。できたら集めたものを、それがはいってきた国別にわけると

おもしろいと思います。

○自分がすんでいる地方の方言を集めましょう。また、それをひとつひとつ、ひょうじゅん語と比べてみましょう。

4　わたくしたちの言葉は、土地によってちがっているばかりでなく、つぎのようなことによっても、うんとちがいます。どんなにちがうか、考えてみましょう。

(イ)　ていねいな言葉、ぞんざいな言葉

(ロ)　おとなの言葉、子供の言葉

このほか、いろいろな場合も考えてみましょう。

(五)　母の物語

1　ある人のおもかげをしのぶ方法には、いろいろあります。その人の書いた日記や手紙を読んでみる、その人について書かれた記事や物語を読んでみる、その人の研究したものを調べてみる、身のまわり品を集めてみるなど、「母の物語」では、どんな方面から、母の心を知ろうとしているのですか。

1　　2　　3

2　「母の物語」のところを読んで、感想を書きなさい。

(イ)　母の思い出―

(ロ)　母への手紙―

(ハ)　母の力―

3　「母の思い出」を読んで、つぎの問題を研究してみましょう。

○(一)と(二)とを比べて研究しましょう。

(イ)　どんな思い出が書いてありますか。

(ロ)　どんな書き表わし方をしていますか。

○(一)は岡本太郎という人の母(岡本かの子)(二)はアナトール・フランスという人

の母の思い出です。文章を読んで、どんな母だということがわかりましたか。

○　みなさんも、自分のおかあさんについて、お友だちと話し合ってみましょう。

○「わたくしのおかあさん」という題で、作文を書いてみましょう。

4　「母への手紙」を読んで、つぎの問題を研究しましょう。

○　この手紙はルイ・フィリップという人が母へ出したものです。三つの手紙はそれぞれ何を知らせようと思って書いたのですか。

○　ルイは、手紙を書くことを、どんなことだと思っていますか。(文章のどこかにそれが表わされています。)

○　ルイの母をしたう気持は、どんなところに表われていますか。ノートに書き出してごらんなさい。また、お友だちと話し合ってみましょう。

○　ルイの手紙を読んでみて、手紙を書く場合、相手に自分の心をよく伝えるのには、どんなことに気をつけたらいいか考えてみましょう。

5　「母の力」を読んで、つぎの問題を考えてみましょう。

○　だれの母のことを書いてあるのですか。

○　諭吉の母は、どんな人がらの母ですか。それが、どこでわかるかも、よく考えてみましょう。

○　福沢諭吉について、研究してみましょう。

○　ほかに、母についての物語を読んで、お友だちの前で発表しましょう。

新しく出た言葉

あいじょう……139
アイスクリーム……86
あおせん……135
あおやま……112
あか……84
あずかる……90
あたためて……111
あっさり……12
あとかたもなく……109
ありあり(と)……120
ありたけ……126
ありのまま……124
アルコール……77
あわ……64
あわただしく……17
あわゆき……85
あんどん……106
いいきる……121
いいつけ……130
いきがい……9
いさりび……11
いさん……122
いってき……68
いっぽいっぽ……120
いど……130
いない……20
いなや……91
いまがわ……48
いろりばた……137
うえじに……10
うけついで……123
うすやみ……112
うたかた……75
うつらうつら……108
うなずき(うなずく)……137
うらめしそう……88
うんめい……74
エイぐみ……58
えきたい……67
えらい……58
エンジン……24
えんばん……22
おおぐみ……21
おおた……48
おかまいなく……90
おくそこ……96
おさない……64
おしつけられる……27
おもいなやんで……134
おもいやり……131
おもかげ……137
オルガン……62
かいごう……18
かいだん……6
かいり……7
がいこく……18
がいらいご……104
かかった……57
かかりきり……128
がくしゃ……43
がくもん……138
かけがえもない……121
かけごえ……98
かげぐち……133
かこんで(かこむ)……60
かしだし……48
かすみ……70
かぞく……127

かたぐるしく……36
かたずけ……49
がっきゅうぶんこ……41
かつじ……20
かまわず……116
ガリバーりょこうき……34
かるがるしく……123
かわもと……48
かんけい……42
かんしゃ……32
かんたん……86
かんてん……85
かんどう……137
かんばん……94
きいた……30
きんむ……12
ぎんこう……94
くし……130
くだ……76
くつした……118
クリーム……86
くんで(くむ)……129
けいけん……108
けいさつ……18
けっこう……38
けむし……13
げんざい……106
げんば……29
ケージ……26
ケーラー……73
こいけ……48
こうせき……141
こうつう……104
こうどう……28
ごうきん……22
ごうごう……23
こくどう……115
こころがける……111
こじき……127
こたい……67
こっこく……17
こづかい……13
ごっとり……28
こねて……84
ゴムカン……29
こわい……107
こわばった(こわばる)……107
サイダー……75
さかだてる……11
さくしゃ……114
ささやか……112
さしおいて……119
さそわれて……72
さも……87
さらって……73
ざる……30
ざんねん……60
しおじお……118
しけい……22
じじつ……37
しそん……105
じちかい……52
しばしば……71
しぼんで……82
しま……14
しみじみ……12
しみこませ……113
じむしょ……25
しもだ……131

しゃたく……25
しゅうぜん……61
しゅと……71
しゅるい……76
じゅみょう……75
しょうがい……120
しょうじょ……35
しょうせつ……114
じょうりく（りく）……8
しん……70
じんかく……132
じんこうてき……74
しんけん……30
じんせい……123
すいそ……82
スウェーデン……73
すき（すく）……130
すす……67
すず……22
すまい……112
すみ……67
ずめん……119
せいだして……126
セーヌがわ……125
（せかいの）なぞ……42
せきゆ……67
せきにん……46
せつ……99
せっかく……49
せっせ……116
ぜにさし……135
ゼロ……80
せんこう……63
せんたんば……27
ぞうきんがけ……51
ソーダすい……75
そせん……105
たいせき……82
たいふう……8
タイプライター……17
だいがく……140
たいした……135
だいじ……19
だいたい……119
たえず……65
たからじま……42
たきび……63
たして（たす）……136
たすきがけ……129
たたかい……10
たてこう……26
たてこもって……73
たもつ……79
たんこう……25
たんしゃ……26
たんばくしつ……85
ちかい……139
ちぐさ……113
ちしき……38
ちほう……108
ちょきん……94
つうしんしゃ……18
つごう……43
つながり……103
つまり……99
つむ……13
つめ……103
てこぼこ……22
てっかん……29
てにてに……56
てまね……99

てら……138
でんえん……72
でんしけんびきょう……66
でんちゅう……94
てんてん……11
でんわ……16
とうだい……4
とうとい……132
とうようかんじ……20
とうりがかり……127
どうり……38
ときおり……6
どくしょかい……33
どくりつじそん……140
とくゆう……110
どぶかわ……84
トム・ソーヤ……34
とらえる……95
とろろじる……84
トン……31
ナイフ……62
なおして（なおす）……50
ながさき……131
なかつ……127
なかやまのおばさん……91
なくして（なくす）……55
なくなり（おなくなり）……120
なさけぶかい……133
なにげなし……39
なまけもの……123
なまり……110
にじむ……111
にずくりば……24
にっぽんご……106
にぶい……7
にやにや……129
ぬか……131
ねうち……39
ねんのため……38
のぐちひでよ……42
のり……62
ノルウェー……73
ば……119
ばあい……18
はかなさ……65
ばくはつ……30
ばくやく……30
バケツ……51
はしわたし……103
はったつ……34
はって（はる）……57
はてしなく……11
はてしらぬ……68
はさみ……62
はず……139
はなれじま……10
はりしごと……128
ばらばら……49
はれつ……82
はんだん……19
ばんごうふだ……53
ひとくち……102
ひとりぼっち……122
ひとごみ……110
ひょうし……46
ひょうじゅんご……108
ひょうりゅうせん……7
ぴょういん……25
ひるがえし……24
ビール……75
ふえて（ふえる）……46

ふかふかした……85
ふきこみ……114
ふきつける……9
ふきそく……29
ぶきみ……6
ふさわしい……13
フクオカ……17
ふざける……50
ふしあな……65
ふた……78
ぶつぶつ……127
ぶっしつ……73
ふみしめ(ふみしめる)……30
ふゆやすみ……97
ふりかえる……15
ふるいたたせる……140
ふるさと……110
ぶんしょう……19
ぶんせん……20
ぶんぱい……122
へんしゅうきょく……16
ほうそく……65
ほうげん……108
ぼうけん……34
ぼうさん(おぼうさん)……138
ぼうぼう……127
ほおえまず……13
ぼくじょう……115
ほけん……94
ほしの……48
ボスター……56
ボタン……23
ぽつぽつ……31
ぽつりぽつり……88
ほのかな……7
ほんだな……48
まぎれる……122
まごころ……124
まじめ……35
まず……16
またがし……54
まとい……127
まなこ……65
まんいん……93
みがきあげる……111
みごしらえ……129
みさき……13
みだし……19
みちびいて……141
みとめる……35
みみなれ……109
ミリメートル……66
むさぼる……24
むせん……17
むぞうさ……16
むりやり……90
めいじ……140
めったに……68
めりこんで……118
もくそく……135
ものごころ……14
もらう……60
やくしょ……18
やぐら……26
やに……67
やれやれ……131
やわらかい……118
ゆうかん……23
ゆうじょう……11
ゆきち……127
ゆくえ……65
ゆげ……67
ゆずる……89

ようかん……85
よどみがち……84
よろしく……40
らせんじょう……6
リボン……115
りょうて……116
リンカーン……42
りんてんき……22
ルイ……121
れんが……27
レンズ……7
ろ……22
ローラー……21
わく……29
わたりどり……113

漢字

照(6)
状(6)
階(6)
帯(7)
求(8)
張(9)
絶(10)
情(11)
勤(12)
務(12)
兄(13)
弟(13)
米(13)
判(19)
断(19)
章(19)
当(20)
版(21)
輪(22)
区(24)
曲(28)
現(29)
管(29)
規(29)
則(29)
謝(32)
態(35)
失(35)
認(35)
識(38)
庫(41)
責(46)
貸(47)
銭(47)
芸(49)
辺(50)
治(52)
液(66)
住(69)
定(69)
程(70)
塩(72)
果(73)
質(73)
種(76)
類(76)
保(79)
験(80)
素(82)
胃(85)
冷(86)
停(88)
留(88)
席(88)
預(90)
貯(94)
険(94)
覚(96)
交(104)
祖(105)
孫(105)
在(106)
経(108)
歯(110)
牧(115)
許(116)
止(117)
届(121)
遺(122)
産(122)
族(127)
貧(128)
尊(128)
評(132)
測(135)
寺(138)
独(140)
導(141)
再(141)
功(141)

国語五年生下の編修について

一、本書は教育基本法、学校教育法、学習指導要領（国語科編）検定基準などを基とし、最近における新教育運動の研究やアメリカ教科書の仔細な検討を加味して編修した。形態としては、如何なるカリキュラムにも応じ得る深さと幅を持った単元学習をとっているのはこのためである。すなわち、生活単元ともいうべきものを縦軸とし、国語学習の基礎的体系を横軸とする座標に学習単元を設定しているところに本書の独特な立場がある。

二、五年生用は上下二冊とし、上は四月から十月まで、下は十一月から三月までに使用するように構成されている。

三、本書は五単元から成っている。「働く人々」では、国家の再建につくすさまざまなすがたをえがき、場面に応ずる描写のあり方を味わっていくことをねらいとしている。「読書会」では、読書について、その意義や方法を理解し、具体的な技術を身につけ、同時に散文から会話体の文、ついで脚本へと連関していくすがたを捉えることをめあてとしている。「自然を見つめて」では、生活をとりまく事象を科学的に見つめていく態度と方法を養いそれをいかに表現していくかを考えさせていくのである。「わたくしたちの言葉」では、われわれの生活の中で言葉の果している役わりの重大さを興味の中に理解し、そういう言葉意識から、国語の実体を考えていくことをねらっている。「母の物語」では、母の愛が人間生活をゆたかにし、高めていくことを主題とし、表現の上からは、かわった形をとっているけれども、いかなる表現も結局は愛情につながることを味あわせたい。

四、本書の新出語いは総数三七五語である。新出漢字は八一字である。

五、巻末に「語い表」と「お仕事の手引」をのせて、学習や指導の便をはかっている。「お仕事の手引」は一例を示したので、これをもとにして多様な国語活動がなされんことを期待している。

Copyright 1950, by
The Gakkō Tosho Kenkyūkai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

小国 520

国語五年生　下

Approved by Ministry of Education
(Date　　1950)

感謝のことば

左記の作品を本書に掲載させていただきましたことについて、著作者の方々にあつく感謝いたします。

なお、規則や指示にしたがって多少加除訂正のやむをえなかったことについて、御諒承をお願いいたします。

働く人々の中の「詩」……大江　満雄氏
我等の燈台……時事新報社
新聞の話……藤田　信勝氏
石炭をどのように利用しているか……恵良　弘司氏
おじさんの手紙の一部…古谷　綱武氏
学級文庫……落合聰三郎氏
ふしぎな自然、けむりのゆくえ
あわのじゅ命……立花　太郎氏
言葉の話の一部……石黒　修氏
母の思い出……岡本　太郎氏
母への手紙……ルイ・フィリップ作　三好達治氏訳
母の力……「福翁自伝」

編者　広島高等師範学校教諭（広島市東千田町）　今石光美　大西久一　小川利雄　原田直茂

表紙　田原輝夫　さしえ　杉浦石夫

昭和二十五年　月　日　印刷
昭和二十五年　月　日　発行

定価　円

著作者　財団法人学校図書研究会（広島市東千田町広島高師附属小学校内）　会長　森岡文策

発行者　学校図書株式会社（東京都港区芝三田豊岡町八番地）　代表者　川口芳太郎

印刷者　図書印刷株式会社（東京都港区芝三田豊岡町八番地）　代表者　川口芳太郎

発行所　学校図書株式会社（東京都港区芝三田豊岡町八番地）

本書の指導書・ワークブック・註釋書並びにこれに類する一切のものの無斷發行を禁ずる

広島大学図書
0130449661

おことわり

本書の用紙は来年度使用教科書から
より良質のもの（新教科書用紙）を使
用することになつて居ります。